

立科町文化財調査報告書第4集

蓼科山麓  
雨境峠祭祀遺跡群  
概報

1994年3月

長野県北佐久郡立科町教育委員会

立科町文化財調査報告書第4集

蓼科山麓  
雨境峠祭祀遺跡群  
概報

1994年3月

長野県北佐久郡立科町教育委員会



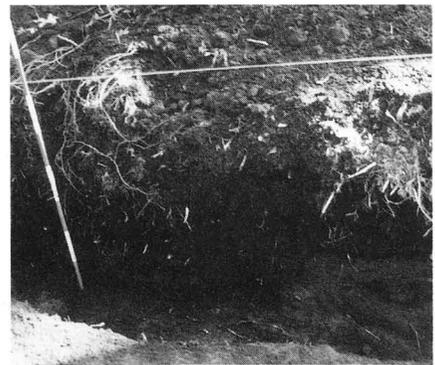
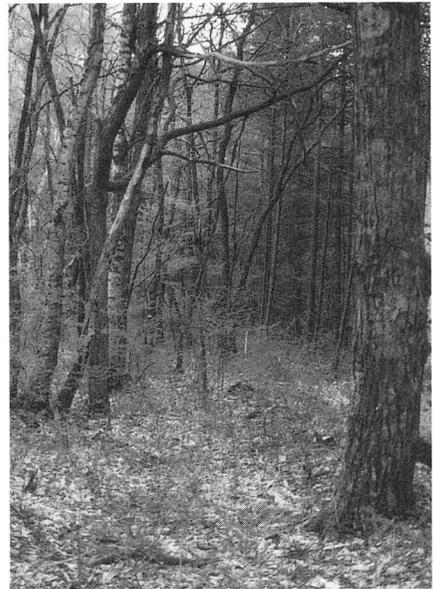
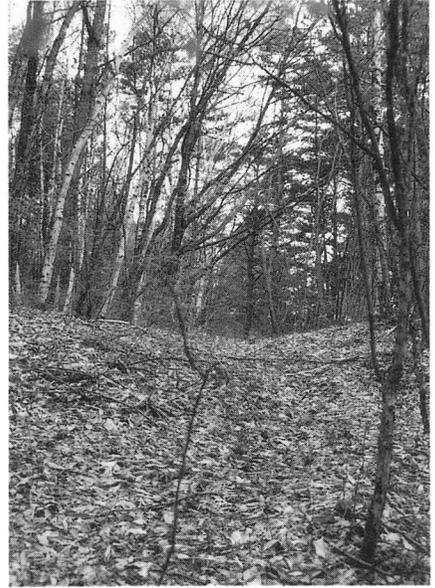
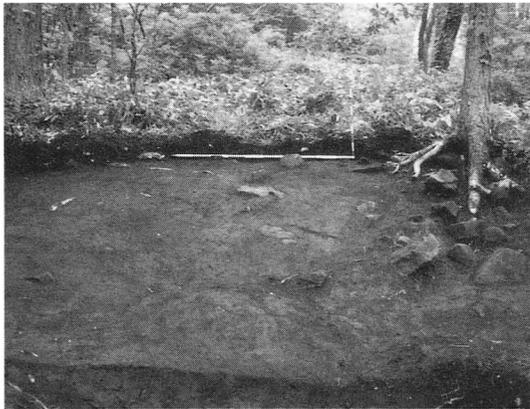
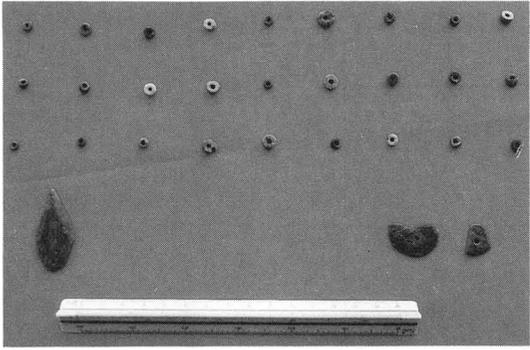
峠の祭祀遺跡・鳴石

鳴石遺跡は、磐石（鳴石）に峠の神・蓼科山の神を招き降ろして奉斎した祭祀遺跡である。手前の卓状の石から鳴石に向うと正面が蓼科山である。



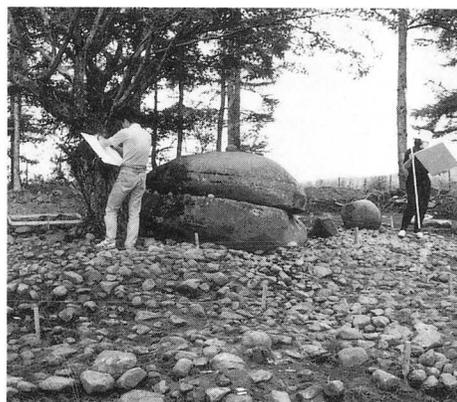
蓼科山の景観と鳴石遺跡の集石遺構

上：赤沼平（女神湖西岸）遺跡付近の景観と蓼科山 下：鳴石と集石遺構



古東山道推定路の景観と遺構

〈右〉 上：薬研沢付近 中：箕輪平（猿小屋南付近） 下：赤沼平の地層  
〈左〉 上：勾玉原遺跡出土遺物（上田市立国分寺資料館蔵） 中上：勾玉原Ⅰ 中下：鍵引Ⅰ 下：赤沼平



法印塚と中世古道推定路の遺構

上：法印塚全景 中右：法印塚 中左：勾玉原Ⅱの地層  
下右：勾玉原Ⅱの遺構 下左：調査風景

# 序

立科町教育委員会教育長 中島正恵

古代から人々は、道や川を主要交通路として行動範囲を拡大しつつ文化を伝播し、情報を交換し、交易を盛んにして参りました。

当時、村から村へ、都から地方へと続く道は、いくつかの峠を越えての長く、険しいものでありました。厳しい自然と戦い、食糧の確保、装束、方角の確認、安全祈願等々この道中繰り広げられた数々の苦闘の物語は想像を絶する危険とロマンに満ちたものであり、どこをどのように往来したかは、歴史を解明するために興味深い研究課題であります。

近年、道路整備や、開発が急速に進行する中で、これらの足跡が破壊され往時を偲ぶ貴重な史跡が失われつつあります。

立科町南西に位置する蓼科山北西山麓の雨境峠には峠神を招いて奉祀した「磐座<sup>いわくら</sup>」と考えられる鳴石・鍵引石や、峠神に「幣<sup>ぬき</sup>」を手向けて旅の無事を祈った「祈り場」と考えられる勾玉原・赤沼平などの祭祀遺跡があり、いずれも古東山道に関係する遺跡ではないかと言われて参りました。

立科町教育委員会では、平成5年度に雨境峠の祭祀遺跡群の範囲確認調査を実施いたしました。その結果、鳴石遺跡に於いて、その周囲から想像しえなかった、上円下方の基壇状の石積が発見され、従来からの諸説通り、峠道の安全祈願をした祭祀遺跡であることがほぼ確認されました。しかし、更に調査を要する課題があり、平成6年度に引続き調査を予定しております。

今般、第1次調査結果を「概報」としてここに報告するものであります。この報告書が多くの皆様にご覧いただき、ご意見をお寄せいただくと同時に、文化財保護の大切さについての深いご理解をいただく一助になれば幸いです。

終わりに、今回の調査を実施するに当たり、ご指導とご援助をいただきました、文化庁、県教育委員会文化課をはじめ、調査団長の小林幹男先生、望月映先生他、御協力をいただきました関係各位に対し心より感謝を申し上げご挨拶と致します。

# 例 言

- 1 本書は、立科町教育委員会が主体となって、遺跡の現状と範囲の確認を主たる目的に実施した長野県北佐久郡立科町大字芦田八ヶ野の雨境峠祭祀遺跡群の発掘調査の概要を記したものである。発掘調査は、平成5年7月から9月の3カ月間にわたって行なわれた。
- 2 本調査は、遺跡の重要性に鑑み、別記の雨境峠祭祀遺跡群調査会を設置し、発掘調査団を組織して実施した。
- 3 本調査の実施に際しては、長野県教育委員会文化課・立科町当局をはじめ、地元の立科町・望月町の方々のご協力があった。特に、作業員の方々には、平成5年の記録的な冷夏・長雨の不順な天候の中で、終始献身的に調査にご協力いただいた。心から感謝申し上げ、労を稿きたい。
- 4 本調査には、国学院栃木短期大学・長野女子短期大学の学生諸君が、調査補助員として協力してくれた。熱心な努力に併せて感謝申し上げる。
- 5 本報告書の執筆は、立科町教育委員会と協議しながら、調査員の小林幹男・望月映が下記のように分担した。  
I・II・III-2・3・IV-1・2 ……………小林幹男  
III-1・IV-3 ……………望月 映
- 6 本報告書作成の作業の分担は、下記のとおりである。  
遺 構 実 測 図 の 作 成 (現 地) ……………望月 映・清水さつき・和田朱更  
安川千香子・永原伊津子・熊井理恵  
実 測 図 の 整 理 ・ ト レ ー ス ……………望月 映・清水さつき  
遺 物 実 測 図 ・ 拓 本 ……………望月 映  
写 真 図 版 の 作 成 ……………小林幹男
- 7 本書に掲載した写真は、小林幹男が撮影したものを使用した。
- 8 本書の編集は、調査員の小林幹男・望月映が協議して行ない、立科町教育委員会、および立科町雨境峠祭祀遺跡群調査会が校閲した。  
本書の内容は、あくまで現時点での概要であり、今後継続する問題、整理中のものは後日発行される本報告書に譲りたい。  
また、雨境峠祭祀遺跡群は、古東山道に関係する峠の祭祀遺跡、及び中世の古道に関する石塚(ケルン)として、多くの先学が調査を行ない、報告されている。今回の調査と本書の執筆には、これら先学の研究の成果に負うところが大きい。そして、県内外の多くの方々が、鳴石遺跡等の調査を熱心に見学され、有益なご示唆、ご意見をいただいた。併せて心から謝意を表する次第である。

# 本文目次

序	
例言	
I 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
1 鳴石遺跡	5
2 勾玉原遺跡	6
3 赤沼平（女神湖西岸）遺跡	7
4 鍵引石遺跡	9
5 法印塚	10
6 中与惣塚	11
7 与惣塚	12
8 賽ノ河原	12
III 遺構と遺物	14
1 鳴石遺跡	14
(1) 集石 1	17
(2) 集石 2	18
(3) 周辺地区の礫群	19
(4) 巨石 1（鳴石）	20
(5) 巨石 2	20
(6) 溝 址	20
(7) 遺 物	21
2 法印塚	22
IV 古道の調査	29
1 古東山道推定地点の調査	29
2 中世の古道推定地点の調査	33
3 勾玉原 2 地点出土の黒曜石片	34
おわりに	34

# 図版目次

- 図版 1 峠の祭祀遺跡・鳴石
- 図版 2 蓼科山の景観と鳴石遺跡の集石遺構
- 図版 3 古東山道推定路の景観と遺構
- 図版 4 法印塚と中世古道推定路の遺構

## 挿図・図面目次

第 1 図	鳴石遺跡付近の景観と蓼科山	3
第 2 図	雨境峠祭祀遺跡群分布図	4
第 3 図	郡境尾根付近の景観と蓼科山	6
第 4 図	赤沼平遺跡出土遺物	7
第 5 図	赤沼平（女神湖西岸）遺跡と鍵引石遺跡周辺の出土遺物	8
第 6 図	鍵引石と塩沢堰	9
第 7 図	雨境峠付近の祭祀遺跡・石塚（ケルン）分布図	11
第 8 図	調査前の鳴石遺跡	14
第 9 図	鳴石遺跡の地形（コンター）図	15
第 10 図	鳴石遺跡の遺構及び地層断面図	16
第 11 図	鳴石遺跡・集石遺構の調査	18
第 12 図	鳴石遺跡の巨石と集石 2	19
第 13 図	鳴石遺跡・周辺地区の礫群	19
第 14 図	鳴石遺跡出土遺物実測図	21
第 15 図	調査前の法印塚	22
第 16 図	法印塚断面図	23
第 17 図	中与惣塚出土銅製品	25
第 18 図	中与惣塚出土の鉄製品(1)	26
第 19 図	中与惣塚出土の鉄製品(2)	27
第 20 図	中与惣塚出土銭貨	28
第 21 図	古道調査地点断面図	30
第 22 図	猿小屋地籍出土の蕨手刀	31
別図 1	雨境峠祭祀遺跡群・鳴石遺跡実測図	35・36
別図 2	雨境峠祭祀遺跡群・法印塚実測図	37・38

# I 調査の経過

雨境峠祭祀遺跡群の調査は、昭和4年(1929)に藤森栄一氏等が、諏訪史編纂会の事業として踏査している。そして、昭和6年(1931)には八幡一郎氏、昭和8年(1933)には大場磐雄氏らが相次いで現地調査を実施し、一志茂樹氏らも幾度か現地を踏査している。

爾来、鳴石及び鍵引石は、峠の祭祀遺跡・磐石として注目され、勾玉原遺跡は豊富な祭祀遺物を出土する遺跡として周知された。また、道路脇に点在する賽ノ河原・与惣塚・中与惣塚・法印塚などの石塚(ケルン)は、中世の遺跡として極めて貴重であることが報告されている。

雨境峠祭祀遺跡群の存在は、これら先学の調査と報告によって、広く県内外研究者の注目を集め、それ以来調査と保存の必要性が説かれてきた。

しかし、蓼科山麓の景観と情勢は、わが国経済の高度成長と観光開発の進展によって大きく変貌した。特に、高原道路の改修・拡幅により、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線が開かれ、昭和39年(1964)5月に蓼科有料道路が開通すると、開発のテンポが一層加速され、道路工事によって賽ノ河原・与惣塚などの一部が破壊される状況が発生した。こうした情勢の中で、昭和41年(1966)11月に「新産都市等開発地域埋蔵文化財分布調査」の一環として詳細な調査が行なわれ、報告書が作成された。

立科町では、平成元年(1989)に圃場整備に伴う大庭遺跡の発掘調査を実施し、平成2年4月には、合併40周年を記念する『立科町誌』の編纂事業を開始し、町の歴史研究・学術調査の気運も大いに醸成された。雨境峠祭祀遺跡群の調査は、このような経過を辿って県教育委員会と協議し、協力を得ながらも、平成4年度に町の単独事業として、古東山道と中世の古道推定路などの調査を実施した。

そして、平成5年度は、雨境峠祭祀遺跡群調査会を設置し、調査団を組織して、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受け、鳴石遺跡と法印塚を中心に、7月から9月にわたって調査が行なわれた。調査面積は、鳴石遺跡が743㎡、法印塚が290㎡、古道関係で勾玉原Ⅱが42㎡、勾玉原Ⅲが32㎡、鍵引Ⅱが約23㎡、鍵引Ⅲが約18.7㎡、鍵引Ⅳが約12㎡、赤沼平が44㎡、箕輪平Ⅰが約24㎡の計1,228.7㎡にも及び、不順な天候の中で、長期間の困難な調査となった。

この調査のために設置された雨境峠祭祀遺跡群調査会の構成、雨境峠祭祀遺跡群調査団の組織は次のとおりである。

## 〈雨境峠祭祀遺跡群調査会〉

会 長	市川正志	立科町教育委員長
副 会 長	中島正恵	立科町教育委員会教育長
	保科信史	立科町文化財保護委員会会長

調査団長 小林幹男 立科町誌編纂委員長・長野女子短期大学教授  
 理事 土屋わか 立科町教育委員長職務代理  
 矢崎大悟 立科町教育委員  
 奥村栄市 立科町教育委員  
 中村一朗 立科町文化財保護委員会副会長  
 田中 幹 立科町文化財保護委員  
 佐藤芳男 立科町文化財保護委員  
 瀧澤 猛 立科町文化財保護委員  
 小林 亮 立科町誌常任編纂委員  
 事務局長 堀 利一 立科町教育委員会教育次長  
 事務局員 両角幸男 立科町教育委員会社会教育・同和教育第2係長  
 笹井恒翁 立科町教育委員会社会教育・同和教育第2係主任  
 竹重和明 立科町教育委員会社会教育・同和教育第2係主事

〈雨境峠祭祀遺跡群調査団〉

調査団長 小林幹男 立科町誌編纂委員長・長野女子短期大学教授  
 (日本考古学協会会員・日本人類学会会員)  
 調査員 望月 映 長野県塩尻高等学校教諭・前長野県埋文センター専門主事  
 調査作業主任 田中 幹 立科町文化財保護委員  
 調査補助員 清水さつき 国学院栃木短期大学学生  
 和田朱更・安川千香子・永原伊津子・熊井理恵 長野女子短期大学学生  
 調査作業員 倉見 渡 長野県考古学会会員  
 吉沢浩矣・小池嘉一・今井徳一郎・笹井義幸・伊藤 理・竹重祐夫・  
 伊藤恵二・清水俊行・川井 勲・田中千里・荻原 伸・小池 弘・  
 今井真知子・山浦松子

調査の準備は、平成5年6月21日に鳴石遺跡・法印塚遺跡、及び古道調査地点の与惣塚Ⅱ・Ⅲ地点、鍵引Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点、赤沼平・箕輪平Ⅰ・Ⅱの調査予定範囲を決定して杭打ちを行なった。さらに、7月11日から3日間にわたって調査の準備作業と鳴石遺跡のトレンチの設定、杭打ちを実施し、7月27日から鳴石遺跡の調査に着手した。

法印塚の調査は、8月9日にトレンチを設定し、8月12日から調査に着手し、この間、鳴石遺跡の調査と平行して実施した。この両遺跡の調査は、9月3日まで現地の作業を継続した。また、古道関係の調査は、鳴石遺跡・法印塚遺跡の作業状況を睨みながら、8月23日に与惣塚Ⅲ地点から調査を開始し、逐次調査地点を移動して実施した。その後、実測図の整理・トレースなど、作業は平成6年3月にまで及んだ。この報告書は、調査の概要を記すにとどめ、今後に予定される本報告書に調査日誌を記すこととしたい。

## II 遺跡の立地と環境

雨境峠祭祀遺跡群は、北佐久郡立科町大字芦田八ヶ野地籍の南北およそ2,150m、東西およそ250～600mの帯状の範囲に点在し、蓼科山の北西山麓に位置する字鳴石・勾玉原・与惣塚・鍵引・女神湖に所在する（第2図）。

立科町は、北佐久郡の西端部に位置し、小県郡と茅野市に境を接し、雨境付近で大きく溢れ、南部の高原地帯と北部の田園地帯に特色のある地域を形成し、形状は砂時計状を呈している。すなわち、雨境より南方は、雨境峠祭祀遺跡群が所在する高原地帯で、白樺高原の女神湖・白樺湖などを中心に、観光のメッカとなっている。また、山麓を下った北部地域には、古代以来の名刹・津金寺をはじめ、中世の豪族芦田氏の居城・芦田城、中山道の芦田宿があり、この街道沿いに街村を形成し、田園の中に集落が点在する豊かな農業地帯となっている。

雨境峠祭祀遺跡群は、古東山道に<sup>1・2・3・4</sup>関係する遺跡と考えられている鳴石・勾玉原・赤沼平（女神湖西岸）・鍵引石などの4遺跡と、中世に築かれた石塚（ケルン）と考えられている法印塚・中与惣塚・与惣塚・賽ノ河原の4遺跡の計8遺跡を総称し、いずれも道に関する遺跡である。

そして、鳴石遺跡と鍵引石遺跡は、峠の神・蓼科の神を盤石（座）に招き降ろして奉斎したと考えられる遺跡である。また、佐久・小県両郡境の尾根入口にある勾玉原遺跡は、豊富な祭祀遺物を出土した遺跡として知られている。

立科町の西端は、東径138°14'付近、白樺湖西方の大門峠である。この白樺湖畔には、雨境峠祭祀遺跡群の鳴石遺跡・鍵引石遺跡と関係の深い<sup>5</sup>御座岩岩陰遺跡がある。

御座岩岩陰遺跡は、白樺湖南西岸の標高1,420m地点にあり、南北に並立する溶岩塊群からなり、その周囲から先土器時代の石器、縄文早期～晩期の各形式の土器、弥生土器・土師器・須恵器片など出土し、剣形・有孔円板などの石製模造品が検出されている。

雨境峠祭祀遺跡と御座岩岩陰遺跡は、蓼科山と関係が深い。蓼科山は、八ヶ岳火山列の最北端に聳える2,530.3mの火山で、古い成層火山の古八ヶ岳の上に角セン石安山岩の溶岩円頂丘があり、あたかもお碗に飯を盛ったような丸味のある山頂をもっている。この山は、丸味のある山頂の形と、相殿に保食の大神をはじめ、6柱の神を祀ったことから飯盛山とも呼ばれている。

また、蓼科山は、美しい山谷から諏訪富士とも呼ばれ、



第1図 鳴石遺跡付近の景観と蓼科山

アララギ派の歌人  
伊藤左千夫は、明  
治42年(1909)の夏  
にこの地を訪れ、

「信濃には八十の  
群山ありといへど  
女の神山の蓼科わ  
れは」と詠んでい  
る。観光のメッカ  
「女神湖」の名は、  
この歌の「女の神  
山」に因っており、  
湖畔の赤沼平北西  
部と東斜面の鍵引  
石には、雨境峠祭  
祀遺跡群の2つの  
遺跡がある。

また、蓼科山の  
山麓一帯には湧水  
が豊富で、各所に  
多くの出水があり、  
立科三堰とも呼ば  
れる塩沢堰・宇山  
堰・八丁地堰、そ  
して八重原堰の水  
源地となり、江戸  
時代初期に用水堰  
が開かれて以来、  
いまも立科の台地  
を潤す重要な灌漑  
用水となっている。

また、藤森栄  
一氏は、昭和4年  
(1929)に蓼科山

- 1 鳴石 2 勾玉原 3 赤沼平(女神湖西岸)  
4 鍵引石 5 法印塚 6 中与惣塚  
7 与惣塚 8 賽ノ河原

- 〈調査地点〉 a 鳴石1 b 鳴石2  
c 鳴石3 d 勾玉原2 e 勾玉原3  
f 勾玉原1 g 法印塚 h 中与惣塚  
i 鍵引1 j 鍵引2 k 鍵引3  
l 鍵引4 m 赤沼平2



第2図 雨境峠祭祀遺跡群分布図

麓を踏査し、与惣塚付近で白玉・有孔円板・剣形など15・6個の石製模造品を採集して、「勾玉はこの辺り一帯に出るのだという。」と記している。従って、与惣塚付近にも、古東山道に関連する祭祀遺跡が存在したものと考えられる。しかし、この遺跡は、与惣塚の東方付近と考えられるが、遺物の採集地点が明確ではないので、位置の確認については今後の調査を待ちたい。

## 1 鳴石遺跡（第2図 1）

鳴石遺跡は、蓼科山のN-14°-W、直線距離にしておよそ5.8kmの広大な山裾の西斜面に位置し、標高はおよそ1,521m付近に所在する。遺跡の西側約50mには、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線が開かれ、東側には蓼科第2牧場が広がっている。牧場の西側一帯は、現在落葉松が植林されているが、昭和初年ころまで、この辺りはさえぎるもののない広大な草原地帯であった。そして、細い山道が、鳴石から少し東側に離れた牧場の柵付近を南北にとおっていた。この山道を諏訪方面へ向う旅人たちや、蓼科山への登山者、春先に堰普請のため<sup>たげやま</sup>嶽山に登る人々が歩いてとおり、鳴石の脇の草地で休息し、疲れを癒していた。

鳴石遺跡の主体は、鳴石と呼ばれる鏡餅状に重なった2個の巨石である。さらに、今回の調査結果では、この巨石の北西10mにある大石も、同様に磐石的性格をもつものと考えられる。

鳴石の由来については明らかではないが、小諸藩土稲垣市右衛門の宝暦4年(1754)5月の蓼科山検分の記録、『立科山覚附』には、「甘酒之上坂を上り余程の原なり。鏡石と云うあり。差渡三四尺もこれ有るべく、誠に鏡餅のごとく丸く二つ重なり候間、六七分もすきこれ有るなり。これは立科権現の御秘蔵石の由」と記されている。

また、金子詮寅が宝暦8年(1758)に著した『信陽佐久立科高井飯盛山嶺麓 蘆田八箇略誌』<sup>7</sup>には、「麓に鏡石と言う奇岩あり。鳴石ともいう。大きき六七尺なる大石なり。石肌鏡の面の如し。是権現の御宝石と言伝えたり。

昔時、石工来り、此石を割らんと欲して、玄能を以て二つ三つ之を(打)つ。時に山鳴り谷答えて山中震動す。忽ち火の雨を降らせ、石工之が為に死すと。故に人打つことなし。試みに小石を以て之を(打)つ時、其の声金磐の鳴るが如し。是又奇石なり。」とある。鳴石は、いまも多くの人々に親しまれ、観光客などの見学者も多い。

また、鳴石遺跡の調査は、十分記録されていないが、かなり多くの中央・地方の学者・研究者が行なっている。藤森栄一氏は、昭和4年(1929)に鳴石遺跡の調査に訪れ、「すぐ脇に、防火線の掘割があったので、簡単に石製模造品が拾えた。なるほど弁当箱に云々というのも、かならずしもオーバーではないであろう。」と記している。また、大場磐雄氏は、昭和8年(1933)に鳴石<sup>8</sup>を調査し、「この石の北方で滑石製白玉と有孔円板・剣形品の破片および土師器片を採集した。」と記している。一志茂樹氏は、大場氏の「該石の北方数間の箇所より滑石製白玉三箇と有孔円板<sup>9</sup>及び劔形の破片等を採集できた。」<sup>10</sup>という記事を引用している。従って、鳴石遺跡は、滑石製模造

品を幣として手向け、峠の神・蓼科山の神を奉斎した古代の祭祀遺跡であり、その後も神秘的な神石として多くの里人に崇められ、伝承されてきたことがわかる。

## 2 勾玉原遺跡 (第2図 2)

勾玉原遺跡の位置については、桐原健氏の説<sup>11</sup>が一般に伝えられている。その近くには、立科町が遺跡案内板をつくり、雨境峠頂上という立派な御影石の標柱が建立されている。

しかし、その位置については、藤森栄一・大場磐雄・八幡一郎氏らの調査記録、地図上に示された1,579mの三角点の位置との誤差、地名の相違などを総合し、再検討の必要を感じた。

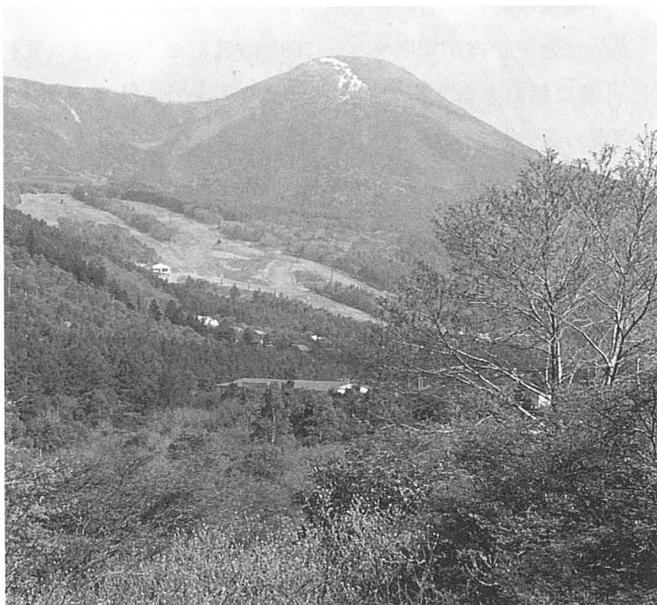
従って、今回の調査に関連して、徹底的な聞き込み調査を実施した。その結果、幸い昭和初期ころ、山の仕事で絶えず蓼科に登り、他の人たちと共に、自身でも遺物を採集したことがある人物・山浦巖氏が芦田小町に居ることが判明した。早速、山浦巖氏に案内を乞い、現地を踏査してその位置を知ることができた。その位置は、図らずも大場磐雄氏<sup>13</sup>が、昭和8年10月に土地の人(恐らく、諏訪の人であろう)の案内で調査し、確認した位置と一致している。

この勾玉原遺跡の位置は、蓼科山のN-20°-W、直線距離にしておよそ5.5kmの位置にあたり、鳴石からの方位はS-20°-W、直線距離にしておよそ550mの位置にある。この遺跡へは、現在は別荘地の道路を迂回して入ることができる。

しかし、最短の道は鳴石から250mほど南に寄った駐車場の先で、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線を横切って、勾玉原地籍の北東斜面を直線的に上ることになる。この斜面を上ると、小県・佐久両郡の郡境にある別荘地帯の北端部に出る。この付近の広い丘陵の西端部が、大場氏や山浦氏によって示された祭祀遺物を大量に採集した勾玉原遺跡の位置である。

遺跡の範囲は、まだ、確認されていないが、この付近の標高がおおよそ1,580m、この位置から峠の頂上にあたる1,581.7mの地点までの距離はおおよそ200mで、頂上を目前にする位置にあたる。

遺跡の中心部分と推定される一帯は、雑草に覆われて、茅や喬木などが茂る荒蕪地となり、北側部分には落葉松が植えられている。



第3図 郡境尾根付近の景観と蓼科山

桐原氏の記す1,579.1mの三角点は、郡境に近いこの落葉松の林の中にある。

この付近は、蓼科山の雄大な姿を望む絶好の位置にあり（第3図）、かつてはこの尾根の上から、入山峠などの上信国境のパノラマのような景観が眺望できたと思う。しかし、いまは落葉松林に視界を遮られて、残念ながら上信の山脈は望めない。

勾玉原遺跡の採集遺物は、大正期から昭和初年にかけて、草刈りや芝焼きの折に多く採集されたと伝えられている。この状況について推考すると、この地方では、用水堰の<sup>たけ</sup>嶽普請に大量の土芝を使用している。例えば、宇山区の大正9年6月8日の『陳情書』には、「毎歳修繕ノ為ニ要スル人員7百人及至8百人ニ至ルノミナラズ、屢々暴風雨ノタメ、臨時ニ要スルモノ之ニ加ハフルヲ以テ、工事ニ用スル土芝ハ、約2万枚ヲ要スルナリ。」とある。

1枚の土芝は、およそ長さ1尺（30cm）幅6寸（18cm）とあるから、2万枚余の土芝を採取するには、約300余坪（990m<sup>2</sup>余）の面積が必要になる。従って、各用水堰では、<sup>たけ</sup>嶽普請用の土芝採取地を各所に設けて、草地の手入れをし、大量の土芝を採取していた。

勾玉原遺跡の遺物の採集は、恐らく、土芝採取地の芝の育成のための芝焼きや草刈り、堰普請の芝切りによって露出した地面から、勾玉などの珍しい遺物を競って採集したものと考えられる。しかし、大量に採集された遺物は殆ど散逸し、現在明らかなのは、上田市立国分寺資料館に剣形の破片1・有孔円板1・小玉27、長門町大門資料館に勾玉2・管玉3・白玉など11、細谷の山浦清子氏宅に剣形9・有孔円板1・管玉2・白玉25、蓼科牧場の白樺高原ホテルに有孔円板1・剣形2などが保管されているだけである。

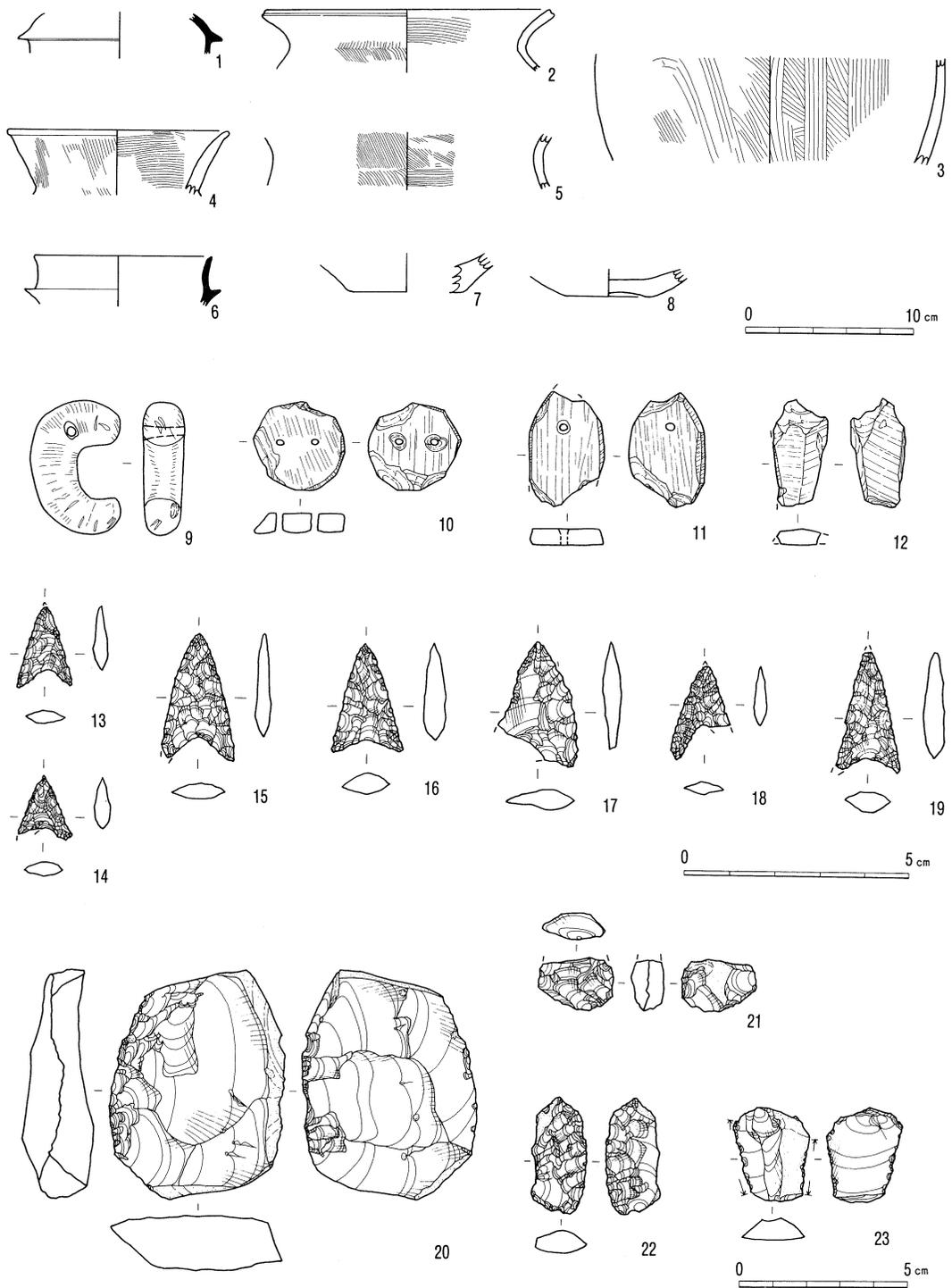
### 3 赤沼平（女神湖西岸）遺跡（第2図3・図版2）

赤沼平遺跡は、蓼泉閣（小県郡長門町）前の女神湖西岸にあり、小県・佐久両郡の郡境に接する標高1,540m付近に位置している。勾玉原遺跡との位置関係は、方位がS-36°-Wで、直線距離にして約1,550m、佐久・小県両郡境の直線上にある。そして、御座岩岩陰遺跡のある白樺湖方面から郡境沿いに来ると、平坦な尾根道からやや急な山道にかかる寸前の位置にあたる。蓼科山からの方位はN-36°-W、直線距離にしておよそ4.5km、この位置からの蓼科山は、美しい山容を湖面に映して、美術愛好家が常に訪れ、絵筆を握って余念のない場所である。



第4図 赤沼平遺跡出土遺物

赤沼平は、昭和41年11月15日に農業灌漑用溜池が竣工し、女神湖となっているが、それ以前は一帯が湿地であった。この遺跡は、蓼科に在住する藤澤万佐男氏が女神湖の渇水時に勾玉1と有孔円板1・剣形破片2などの滑石製模造品、須恵器の坏破片1・土師器の甕破片3片などを採集し、保管されていたため、遺跡の所在が明らかになった（第4・5図）。特に、須恵器坏の破片は、



第5図 赤沼平（女神湖西岸）遺跡と鍵引石遺跡周辺の出土遺物

1～5・9～12・18・19は赤沼平（女神湖西岸）遺跡

6～8・13～17・20～23鍵引石遺跡付近（藤沢万佐男所蔵）

蓋の一部とみられるが、TK208形式に類似する初期の特色を示し、時代の推定に重要である。また、土師器の甕片は、内外にハケ調整を施し、2の外壁にはススが付着している。18・19は良好に成形された石鍬で、18は黒曜石製、19は灰色を呈したチャートで造られている。

#### 4 鍵引石遺跡（第2図4・第5～6図）

鍵引石遺跡は、赤沼平遺跡と女神湖を挟んだ北東方に位置し、南西斜面の標高1,551m付近にある。鳴石遺跡からの方位はS-20°-W、直線距離にしておよそ2.3kmである。また、蓼科山からの方位はN-30°-W、直線距離にして4.25kmの位置にあり、雄大な蓼科山が眺望できる。

鍵引石遺跡の立地は、赤沼平の平坦な道がこの付近で終わり、これから峠道にかかる位置にあたる。鍵引石遺跡付近の微地形は、昭和初年ころまで斜面の裾に広い草地の平坦部があり、鍵引石と呼ばれる巨石が横たわり、その西南方が現在の女神湖、当時の赤沼平の湿地になっていた。

しかし、その後この草地は、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の工事によって土盛が行なわれ、全く往時の姿を一変し、鍵引石も東端部分が道路の下に埋められ、およそ3分の2ほどが塩沢堰の土手に往時の姿をとどめている（第6図）。

塩沢堰の本堰は、正保3年（1646）に完成して通水したが、工事は正保1・2年ごろに行なわれている。塩沢堰の堰台は、鍵引石の西下の斜面を削って築かれ、鍵引石が右岸の土手に安山岩の黒い姿を突出させている。今回の調査の結果、左岸の堰土手は、開削後数回にわたって崩落し、補修工事が行なわれていることが判明した（第21図7）。

鍵引石は、長径が5m、短径が3m、厚さ1.5mの安山岩の巨石で、塩沢堰に向って船の舳状にせり出している。この鍵引石について、宝暦4年（1754）5月の小諸藩士稲垣市右衛門の蓼科山検分の記録、『立科山覚附』には、「この道脇に小僧石あり。」と記し、赤沼池の主小僧の伝承を載せている。この記録は、稲垣市右衛門の蓼科山検分の通路として、江戸中期の蓼科山麓の道筋を詳細に記している。この記録によれば、当時の道は鍵引石の脇を通っていたことがわかる。また、地元の研究者・金子詮寅は、『信陽佐久立科高井飯盛山嶺麓 蘆田八箇略誌』に多くの伝承を載せているが、鍵引石についても、「麓に赤沼の池と言う有り。即ち諏訪へ越える大道端なり。道と池



第6図 鍵引石と塩沢堰

の間に大石あり。小僧石と言う。昔この池に河太郎住み居て、間々往来の人を害す。其居る所は彼の大石の上にて、人の来るを待ち得て、かぎ引きやろう……と言って手を出す。云々（略）」と赤沼池と河童の伝説を詳細に記している。

鍵引石遺跡の遺物については、出土地の明確な記録はないが、八幡一郎氏の『北

佐久郡の考古学的調査<sup>14</sup>に、「有孔円盤 雨境峠に近い赤沼から採集したと伝えられる径二、五糎の破片である。共に二つの孔が貫通している。

小玉 雨境峠付近から最も多量に採集されているのは、滑石製の薄い小玉の類であった。与惣塚発見の四十粒を第三八図下段に、赤沼採集のもの十一粒を第七八図に掲げた。赤沼出土例の内には径六糎に対して長さ七糎に達し、短い管玉と見られるもの四箇、薄い小玉は滑石製四箇、粘板岩製三箇合計七箇ある。」と記されている。

ここに記された「赤沼」は、女神湖西岸の赤沼平遺跡ではなく、「雨境峠に近い赤沼」の記述から推考しても、鍵引石付近のことと考えられる。筆者が記憶している赤沼平遺跡付近の景観は、昭和17年ころのことで、10年ほど後のことになる。しかし、この近くに赤沼池の隧道が計画され、2年余にわたって工事が行なわれたが、当時ほとんど人の通った形跡はなく、丈の長い草が一带を覆い、微小な遺物が発見される状況ではなかった。

また、東京国立博物館所蔵の遺物の中に、昭和2年(1927)徳川頼貞氏寄贈「北佐久郡立科山麓畑中」と記された剣形3・白玉9・有孔円板3の石製模造品がある。この「蓼科山麓畑中」についても調査したが、高冷地の蓼科山麓で大正末年から昭和初期ころ、畑作を行っていた事実はなかった。しかし、調査中に、このころ鍵引石付近で、落葉松の育苗を行っていた畑のあったことが判明した。この「蓼科山麓畑中」とは、恐らくこの育苗圃のことと考えられる。

鍵引石遺跡の性格は、八幡一郎氏の研究の成果や、鳴石と類似する磐石的巨石の存在、鳴石と対称的に雨境峠の南北の両裾部にある位置関係などから推考して、古東山道に関係する祭祀遺跡と考えてよいであろう。

藤沢万佐男氏は、鍵引石遺跡のある女神湖東岸でも、多く遺物を採集している(第5図6)。この遺物は、赤沼平(女神湖西岸)遺跡採集の遺物とほぼ同時期の古式須恵器の碗破片と土師器の甕と坏とみられる底部破片(第5図7・8)などであり、この付近の文化の解明、時代の推定に重要である。また、黒曜石製の石鏃(第5図13~17)、先土器時代とみられる黒曜石製の石器(第5図20・21)は、白樺高原の黎明期の文化を知る上に貴重である。これらの採集遺物は、その他の多くの所蔵遺物とともに、大切に保管して整理に万全を期していただきたいと願っている。

## 5 法印塚(第2・7図 5)

法印塚は、鳴石遺跡のS-22°-Wの方位にあり、直線距離にしておよそ680m、与惣塚地籍の郡境丘陵の最高地点から北東へ200mほど下がった北東斜面裾部の標高1,570m付近に位置している。

鳴石遺跡から法印塚へは、遺跡南方の駐車場に出て、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線を女神湖方面に向かって雨境峠の緩い坂を上り、420~30mほど進んだ地点で、西方(右手)の土手に上り、落葉松林の中を35mほど入ったところである。

法印塚の周囲は、一面クマザサに覆われているが、石塚の頂上には桜の老木と檀の木が生え、

東側には古道の道筋がかなり明確に残っている。石塚の保存状態は、外見上の観察による調査前の所見では、比較的良好と考えられた。しかし、調査の結果では、塚の頂上2箇所が深く抉られ、北と南面部分の礫の石積もかなり壊されていることが判明した。このことについては、「遺構」の項で詳述したい。

法印塚に関する古記録は、小諸藩士稲垣市右衛門の宝暦4年(1754)5月の蓼科山検分の記録、『立科山覚附』に、「鏡石(筆者注 鳴石)より少し登り右の方に傾城塚有り。この塚の向合い与惣大塚という有り。」とある。この史料には「傾城塚」とあるが、与惣塚との位置関係から推考して、法印塚のことと考えられる。

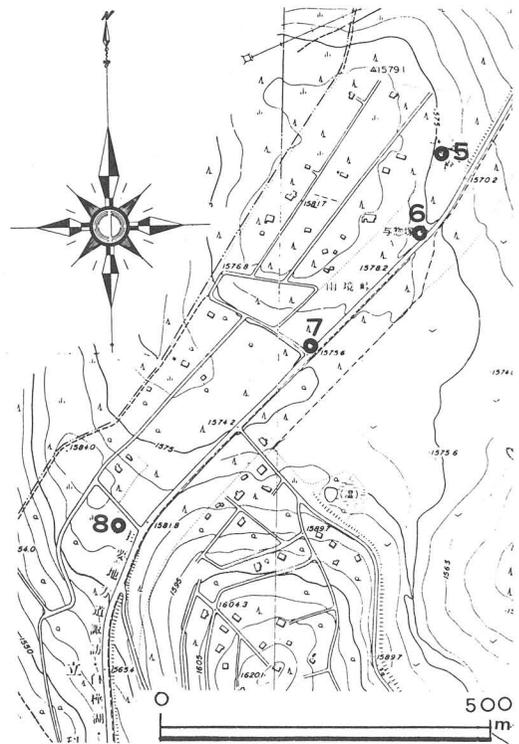
この史料は、法印塚の位置について「右の方」と記している。法印塚の東側に接する古道だとすれば、単に「右に」、あるいは「右脇に」と記すはずである。この記録が「右の方」としたのは、江戸中期の道筋から少し離れた位置であったと考えられる。現在、石塚(ケルン)のやや東方の位置、丁度主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線と法印塚とのほぼ中間地点に道筋らしい形跡がある。この道筋の確認については、今後の調査を待ちたい。

## 6 中与惣塚(第2・7図 6)

中与惣塚は、法印塚のS-20°-W、直線距離にしておよそ150mに位置し、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の西沿いにある。標高はおよそ1,577mで、道路の東側に「雨境峠頂上」の御影石の標柱がある。なお、雨境峠の最高点は、そこから100mほど南に寄った標高1,578.2m付近である。

従って、中与惣塚付近の位置は、雨境峠の頂上を目前にした位置にあたる。雨境峠付近では、この辺りが最も広い平坦面をつくっている。すなわち、南北は中与惣塚の少し北寄りの標高1,575m付近から、与惣塚南東方の標高1,580m辺りにおよぶおよそ400mの範囲、東西は与惣塚の西方150m付近から北東方の標高1,570m付近にわたる450mの範囲が、僅かに北東へ緩傾斜する平坦面である。

中与惣塚の古記録には、金子詮寅の『信陽佐久立科高井飯盛山嶺麓 蘆田八箇略誌』があり、



5 法印塚 6 中与惣塚 7 与惣塚 8 賽ノ河原

第7図 雨境峠付近の祭祀遺跡・石塚(ケルン)分布図

石塚（ケルン）にまつわる次のような伝承を載せている。

「此原にて木曾殿在陣中、今井与惣死し故に言う」と云う伝承をはじめ、小泉根津四の宮城主根津神平と諏訪高鳴城主の姫との悲恋の伝承、北条氏直が芦田氏を攻めた折の陣塚、あるいは「甲斐武田信玄大門峠の合戦の時、此処に陣屋を構え、雑兵夜々騒ぎし故に、夜騒動の原とも言う。」など、真偽計り兼ねるいくつかの伝承を載せ、さらに、今井与惣の伝承については、「野方冠者宮の古事」と題して詳細に記している。

中与惣塚の調査は、昭和41年（1966）に行なわれ、桐原健氏の詳細な調査報告書<sup>15</sup>がある。また、中与惣塚は、昭和42年5月1日に立科町の指定文化財・史跡となっている。

## 7 与惣塚（第2・7図 7）

与惣塚は、中与惣塚の北方から続く平坦面の南西部に位置し、標高は1,575.6m、雨境峠の頂上（最高点）から160mほど下った道路沿いにあり、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の道路工事の際に、石塚（ケルン）の東裾を大きく削られている。中与惣塚との位置関係では、中与惣塚のS-46°-W、直線距離にして260mの位置にある。

与惣塚の規模は、原形が把握できていないので、正確な計測は今後の調査を待ちたい。前掲桐原氏の論文<sup>16</sup>では、径15m、高さ1.6mのケルンとしているが、現状では石塚（ケルン）の西裾が全く把握できないので、計測は不可能である。石塚（ケルン）の頂上には檀の古木があり、周囲は雑草が茂り、落葉松と白樺などの混合林を形成し、西側一帯は与惣塚の別荘地帯である。

## 8 賽ノ河原（第2・7図 8）

賽ノ河原は、標高1,582m付近にあり、現在の地籍図では鍵引地籍の北東端部に位置している。与惣塚との位置関係は、与惣塚のS-48°-Wの方位にあり、直線距離にして360mの位置にある。周辺の地形は、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の東方250mに、標高1,620.1mの小丘陵があり、道路はこの西裾を大きく迂回し、北西方から伸びる尾根との谷間を下って約1kmで鍵引石遺跡、すなわち女神湖の東岸付近に達する。

賽ノ河原は、この位置にかなりの規模の石塚（ケルン）があったと伝えられている。しかし、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の工事によって削られ、現在ほとんど往時の姿をとどめていない。かつてこの位置にあったと伝えられる地蔵尊は、一時期道路の東側に移されていたが、最近もとの位置付近に戻されている。桐原氏の前掲論文によると、石塚（ケルン）の規模は、関係者の話を総合して径20m、高さ2mほどのケルンがあったと想定している。

注

- 1 一志茂樹「我が国中部山地上代高通路の一性格（承前）」『信濃』第5巻第7号 P22
- 2 一志茂樹「諏訪の山道」『古東山道』平成5年12月 信毎書籍出版センター P340
- 3 大場磐雄『神道考古学論攷』昭和18年12月 葦牙書房  
大場磐雄「総説・中部地方」『神道考古学講座』第2巻原始神道期 昭和47年6月 雄山閣 P3
- 4 永峰光一・桐原健「中部山岳」『神道考古学講座』第2巻原始神道期 昭和47年6月 雄山閣  
P108~110
- 5 宮坂虎次「御座岩岩陰遺跡」『長野県史 考古資料編』第1巻(3)主要遺跡（南信） 昭和58年3月  
長野県史刊行会 P388~399
- 6 稲垣市右衛門「立科山見分記事」『長野県史 近世史料編』第2巻(2)東信地方 昭和54年2月  
長野県史刊行会 P53~56
- 7 金子詮寅『信陽佐久立科高井飯盛山嶺麓 蘆田八箇略誌』宝暦8年 保科信史訳 昭和50年3月  
立科町教育委員会
- 8 藤森栄一『古道』昭和41年9月 学生社 P192
- 9 大場磐雄『まつり』昭和42年3月 学生社 P79
- 10 一志茂樹「我が国中部山地上代高通路の一性格（承前）」『信濃』第5巻第7号 P6
- 11 桐原健「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査」『信濃』第19巻第6号 P57  
桐原氏は、勾玉原遺跡の位置について、位置図を添えて、「中与惣塚の北に接して三角点があり（標高1579m）、その付近を勾玉原と呼んでいる。」と記している。しかし、この付近に1579mの三角点は存在しない。位置図に示された地点は、標高1573m付近で、地籍も勾玉原ではなく与惣塚である。勾玉原地籍は、中与惣塚から200mほど北方へ下った地点を南端とし、そこからさらに北方へ1,250mほど下った付近を北端とする道路の西側一帯の窪地から尾根にかけてである。従って、藤森氏は中与惣塚付近の石製模造品の採集地を与惣塚付近と記し、後述の八幡一郎氏も同様に与惣塚と記したものである。この付近の遺跡の所在については、今後の調査を待ちたい。
- 12 梶山林継「峠と古道」『季刊考古学』第46号1994年2月 雄山閣出版 P32  
梶山氏の論文は、「中与惣塚から100mほど佐久に下った場所が勾玉原である」としている。桐原氏の論文を参照したものであろう。
- 13 大場磐雄『まつり』昭和42年3月 学生社 P77・8  
この時大場氏は、諏訪から大門峠へ上って、群境沿いを歩いている。
- 14 八幡一郎『北佐久郡の考古学的調査』昭和9年 北佐久教育会 P160・180
- 15 桐原健 注11 「前掲書」P52~65  
桐原健「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査報告書 昭和四十一年十一月」  
『町の文化財』昭和48年3月 立科町教育委員会 P6~20
- 16 桐原健 注11 「前掲書」P56

### III 遺構と遺物

#### 1 鳴石遺跡（別図1）

今回の調査は、「鳴石」と云われる巨石（巨石1）の周辺を清掃調査し、遺跡の範囲と性格を把握するために実施した。鳴石遺跡は、蓼科山の山麓を北方にのびる尾根筋からわずかに西側に寄った北西斜面に位置している。

遺跡周辺の微地形は、北西に4～5°ほど緩傾斜し、ほぼ平坦面に近いが、調査区の西側では、傾斜が急になっている。

遺跡の現状は、昭和40年ころ植林された落葉松林で、木立が10mを越えるまでに成長している。しかし、それ以前の遺跡の景観は、『長野県史』などに掲載された写真によれば、一面が草原であり、南正面の間近に蓼科山が望まれ、東方には佐久高原から遙か上信国境の山々までが容易に眺望できる絶好の位置にある。また、調査区の東側は、細い林道をはさんで蓼科第2牧場がひろがり、観光シーズンを中心に四季当地を訪れる人々が多い。

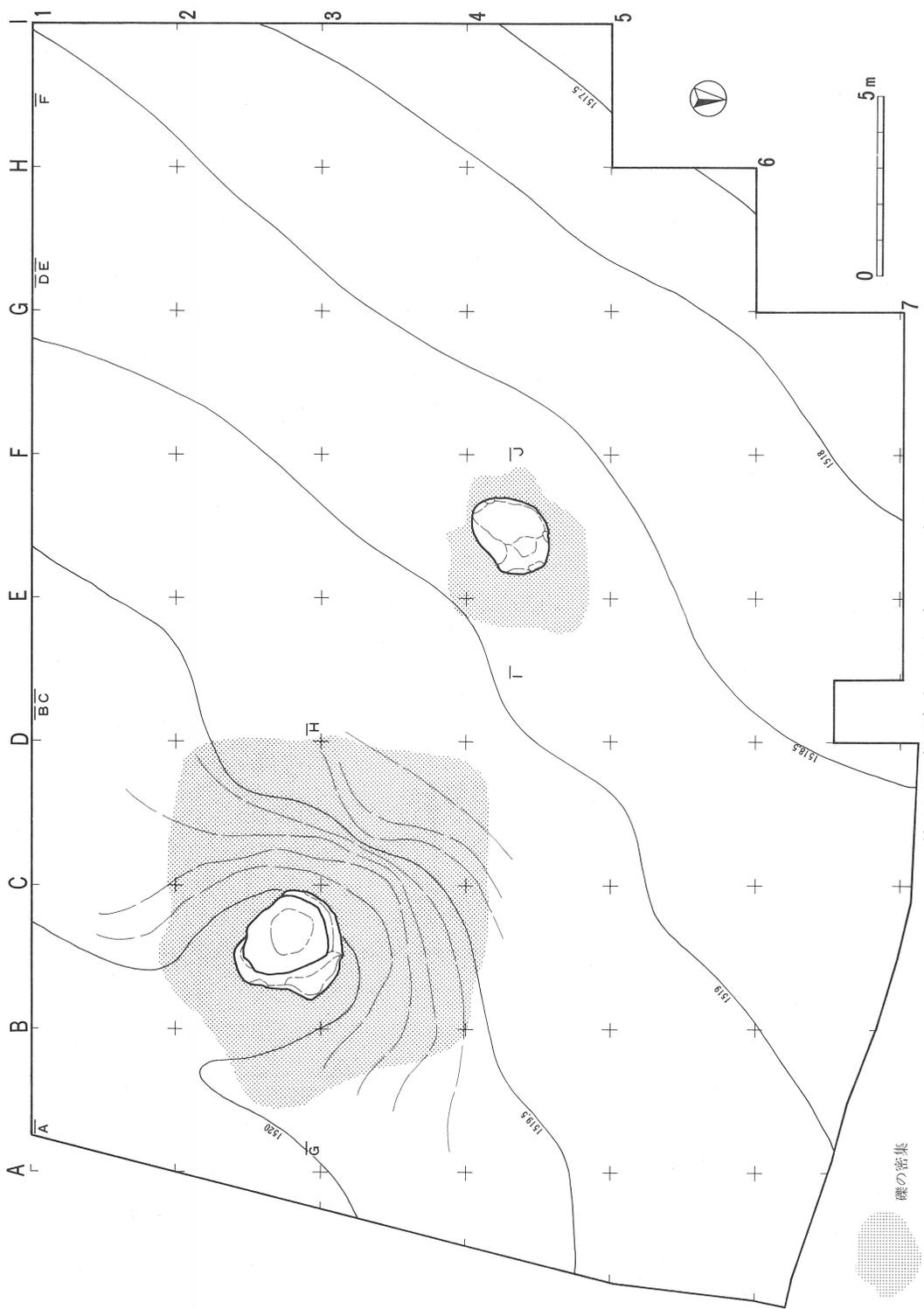
調査の方法は、鳴石（巨石1）の南東8mの地点をA1基点とし、磁北方向1～7、それと直交する東西方向にA～Hの4m×4mのグリッドを設定して実施した。そして、調査の手順は、調査の主目的である遺跡の範囲を確認するため、最も注意を要する巨石1の周囲約5m四方の範囲を残して、その周辺部から調査を開始した。



第8図 調査前の鳴石遺跡

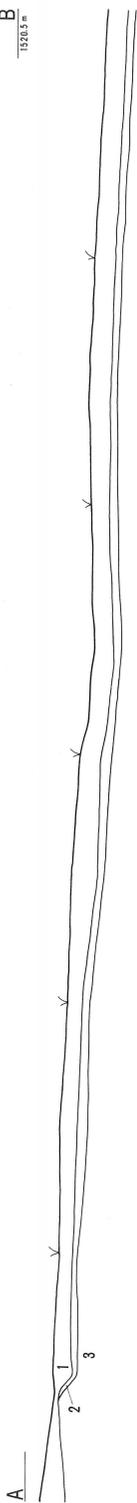
調査は7月27日にA1～A5グリッドから着手し、次第にA1～D1、D1～D5、A5～D5の順に実施し、さらに北・西方へと調査範囲を拡大する方法をとった。調査の進行に伴って、周辺地区にも不規則、または円形に大小の礫が分布することが分かったので、順次調査区を拡大して追究し、最終的には約743m<sup>2</sup>の範囲を調査することになった。

調査は、遺跡のほぼ全面にクマザサが茂り、また落葉松の根と古株などが多く、困難を極めた。

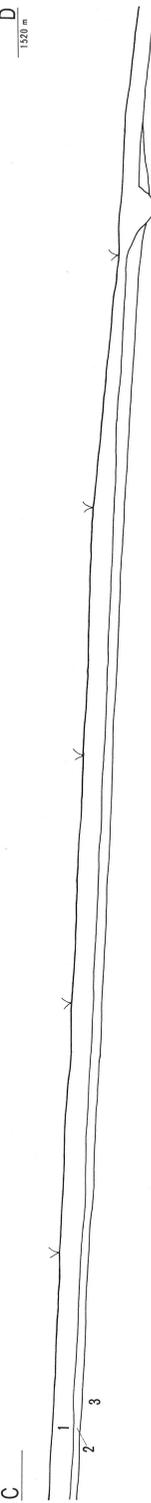


第9図 鳴石遺跡の地形（コンター）図

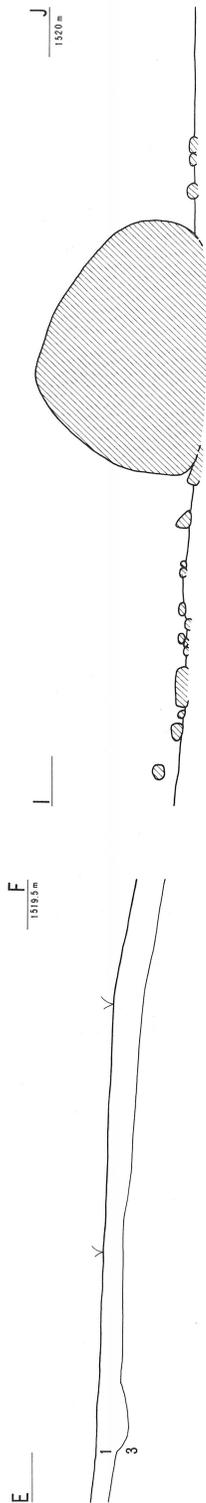
B  
1528.5 m



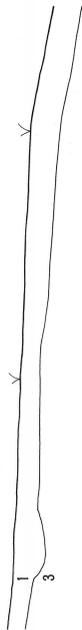
D  
1520 m



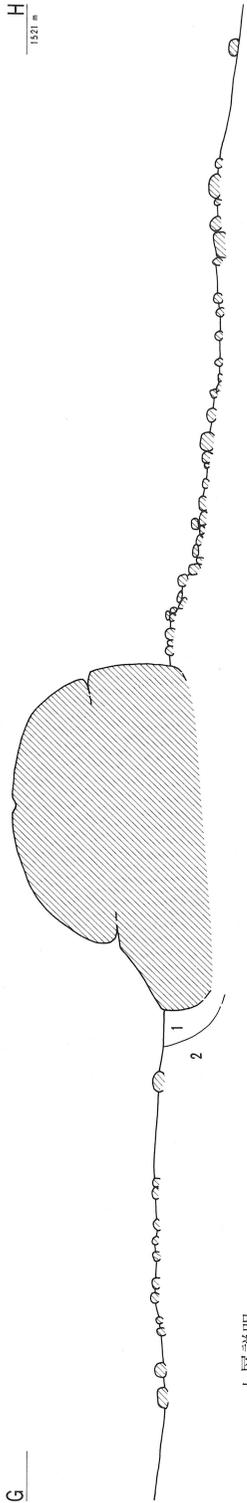
J  
1520 m



F  
1519.5 m



H  
1521 m



0 2 4 m

土層説明

- 1層 黒色土。砂粒混じる。いわゆる黒ボク土で表土層をなす。
- 2層 褐色土。砂粒混じる。粘性あり。ローム粒混じる。
- 3層 黄褐色土。指頭大~人頭大、まれに巨円礫(安山岩が多い)混じる。いわゆるローム層。

第10図 鳴石遺跡の遺構及び地層断面図 (1 : 60)

地層のプロファイルは、およそ10cm前後のクマザサの根を主体とする芝土が表土層をつくり、その下層に、12.3cmの黒色土（第2層）が続き、直ちにローム層（第3層）に達する場合が多くみられた（第10図）。

また、巨石1～巨石2の周辺付近は、黒色土（第2層）の下層に褐色土層（第3層）があり、ローム層（第4層）へと続いていた。しかし、今回の調査は、雨続きの不順な天候と日程の関係から、巨石1～巨石2の周辺付近では、褐色土層上面で調査をとどめ、褐色土層が認められない縁辺地区では、ローム層上面を遺構検出面とした。

鳴石（巨石1）、及び巨石2周囲の調査は、縁辺部分の調査の見通しがついた8月4日から開始した。調査方法は、予め設定されていた4×4mのグリットを4分して、2×2mのグリットに細分し、巨石1を中心にA3・C3グリットではE～W方向に、B2・B4グリットではN～S方向に、幅80cmのトレンチを設定して実施した（第11図）。

この結果、巨石1の周囲、さらに巨石1の北西10mに位置する大石（巨石2）の周囲に、人頭大以下の礫が密集する遺構が検出された。このため、さらに慎重を期して各トレンチの中間の位置に対角線にトレンチを追加設定して調査を進めた。

調査着手前の巨石周囲の状況は、大部分が丈の長い雑草に蔽われ、B1～3の位置に細い見学用の通路が造られ、5～10cmの厚さに碎石が敷かれていた（第8図）。

調査は下草を除去し、厚さ5～6cmの芝土を剥ぐと、直ちに礫面が露出した。礫層が失われた南側では、芝土を剥いで黒色土（第1層）を掘り下げ、第2層（褐色土）、あるいは第3層（ローム層）上面を遺構検出面とした。

（望月・小林）

## （I）集石 1（図版2・第11図）

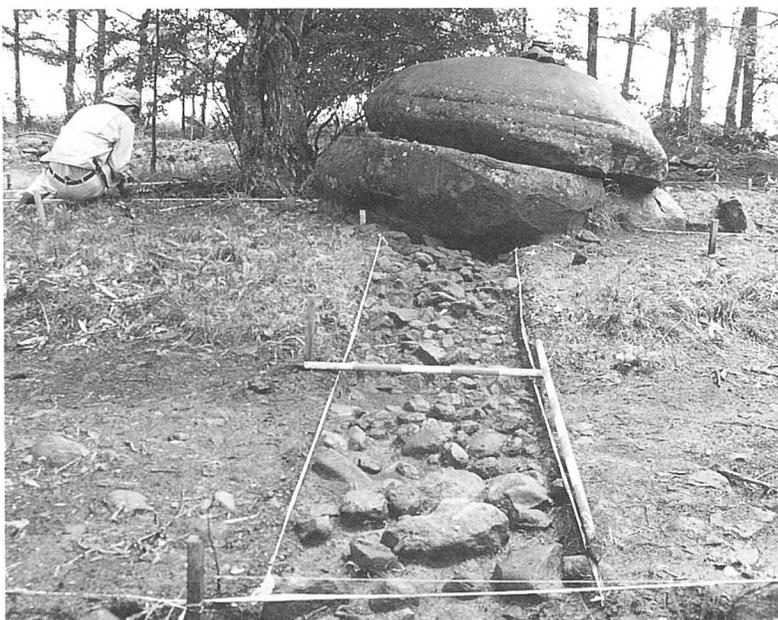
巨石1の周囲には、南北9m、東西10.2mのほぼ方形プランで礫が集積されている。植樹などによって部分的に攪乱された所は、10か所以上に及び旧状が残されていると考えられるのは巨石1の西側だけである。

調査は集石の表面でとどめたので、集石の構造は不明であるが、攪乱部分から推定復元すると、集石の表層は鶏卵大から拳大の円礫からなり、その下部には人頭大の礫も多く見られる。平面的にはD2杭からD4杭にかけては、人頭大の円礫が第2層上面に、礫の端面をそろえて出土しており、その状態から集石の縁辺は、直線状に整えられていたと判断される。しかし、南・北・東側は、集石表面の礫の崩落・移動が著しく、プランの推定は不可能であった。集石は巨石1に向けて厚く積み重ねられ、D列とC列付近の比高は50～60cmを測る。

巨石1の北西側直下、C3グリット南東隅付近では、集石の表面がほぼ平坦面であり、この平坦面と集石外縁の傾斜面との境界線は、巨石1を中心とする径7m位の円弧をなしているようで

ある。以上から巨石1  
周囲の集石は、下面南  
北10m・東西11mの方  
形プランで、上面が径  
7mの円形になるよう  
に構築された遺構と推  
定される。なお、集石  
を構成する礫は、総て  
確認したわけではない  
が、地山である第3層  
に含まれる安山岩が多  
い。

また、巨石1の北西  
約6.5mに、長径103×  
短径93.5cmの隅丸方形  
に近い平石が置かれて



第11図 鳴石遺跡・集石遺構の調査

いる。この平石は、周囲の礫群の石とは隔絶した大きさと、上面がほぼ水平の卓状を呈し、下方は自然石のままの丸味を残している（図版1・別図1）。

この平石の中心点を、檀（ニシキギ科の落葉亜喬木）の木・巨石1（鳴石）の中心点と結べば、方位がS-20°-Eになり、その前方の落葉松の木の間越に、蓼科山の頂上をみることが出来る。この平石は、卓状の形態と規模、巨石1（鳴石）・檀の巨木との位置関係、蓼科山との方位などから考えて、祭祀に用いられた供献用の台石と考えることができる。

古代の人々は、檀の木を勧請木とし、巨石1（鳴石）を磐石（座）として、蓼科山の神・峠の神々を招き降ろし、幣を手向けて供献の品々を整え、旅の無事を祈って奉斎したのであろう。

今回の調査は、遺跡の現状と規模の確認を目的として実施し、集石内部には全く手をつけていない。従って、出土遺物は、集石表面から採集したもののみである。この遺物の中で、古代に位置付けられるものは、須恵器の小破片2片のみである。

## (2) 集石2（第12図）

巨石2の周囲でも、南北約4m、東西5mの範囲に鶏卵大から人頭大の円礫が積み重なっている。構成する礫は集石1より大きめの礫が多い。D4グリット西側では、集石の外縁が直線状に見える所もあるが、その分布範囲は不整形で、基本的なプランは推定できない。ただし、集石が巨石2の下に入りこむ状況や集石1と巨石1の関係から類推すると、集石2が作られた後に巨石



第12図 鳴石遺跡の巨石と集石2

2が置かれたと考えられる。

### (3) 周辺地区の礫群 (第13図)

別図1に示したように、調査区全面に礫が分布する。地山第3層中には安山岩の扁平な円礫・亜円礫が含まれているため、出土した礫が全て遺構にかかわるとは推定できない。また、集石周辺の礫は、集石から移動したものと考えられる。また、G1・H1～H3グリットにかけては安山岩の扁平な亜円礫が円環状に並ぶように観察されるが、遺物の出土や焼土などは検出されてい



第13図 鳴石遺跡・周辺地区の礫群

ない。従って、これらの礫については、遺構とは確認できなかったが、今後の調査を待ちたい。

#### (4) 巨石 1 (鳴石) (図版 1・2)

集石 1 の中心部に安山岩の偏平な巨石が 2 つ鏡餅状に積み重なった状態で存在している。下石は南北 295cm・東西 296cm で、平面は隅丸三角形を呈する。上石は南北 235cm・東西 218cm で、平面は楕円形で、双方とも自然石で加工痕は見受けられない。しかし、上石の南側の表面には 5 か所、敲打による径 10～15cm 位の窪みがあるが、敲打は現在も鳴石を訪れる人たちによって続けられており、当初からあったか否かはわからない。敲打は鳴石の名が示すとおり、拳大の石で上石をたたくともった音がするためと思われ、おそらく上石と下石の間隙が音を反響させるためと考えられる。巨石の東側直下には礫の分布の疎らな所があり、第 1 層黒色土が落ち込む。60cm 位掘り下げたが第 3 層には達せず、検土杖によればさらに 30cm 位でローム層に達した。

巨石の下は調査していないので、巨石の下全体に掘り込みがあるかはわからないが、巨石を据えるために掘り込みを設けたとも考えられる。巨石下の掘り込みと集石の構築、および巨石の据え置については、その前後関係を含めて、今回の調査では明確に判断を下すことはできない。

しかし、巨石 1 自体が自然にあったという根拠は逆に見出せず、巨石 1・集石 1 を人工的な構築物と考えたい。なお、巨石 1 の北側に接して檀の木が生えており、巨石の北西端を押上げるように根を張り、樹幹の太さなどから推定して、かなりの樹齢と考えられる。

#### (5) 巨石 2 (第 12 図)

この巨石は、集石との関係を見ると、集石 2 の上に載せられたものと考えられる。巨石 2 は南北 215cm・東西 217cm の球状の円い巨石である。この巨石にも敲打痕がある。

#### (6) 溝 址 (別図 1)

調査区北東で検出された溝状遺構は、第 2 層褐色土上面を検出面とし、第 1 層の黒色土の落ち込みがあり、その深さは 7～10cm、幅が 30～60cm で、340～350cm の間隔を置いて東西の位置で確認された。両側の溝の間は、黒色土とロームが捏ね合わされた状態で褐色土となったものと考えられる。この部分の地層は、他の所より硬く締り、ブロック状に剝離する状況が確認された。

また、この両溝間の心線の走行方位は S-10°-E で、その線を南に延長すれば、与惣塚の 40～50m 東方を通る。さらに、この線を延長すれば、賽ノ河原遺跡の東方 250m にある標高 1,620.1m の小丘陵の左肩(東方)に向っている。鍵引石遺跡は、この小丘陵の左肩を通過して、800m ほど下った位置にある。因みに、鳴石遺跡と鍵引石遺跡を直線で結ぶと、この小丘陵頂上は、ほぼその中

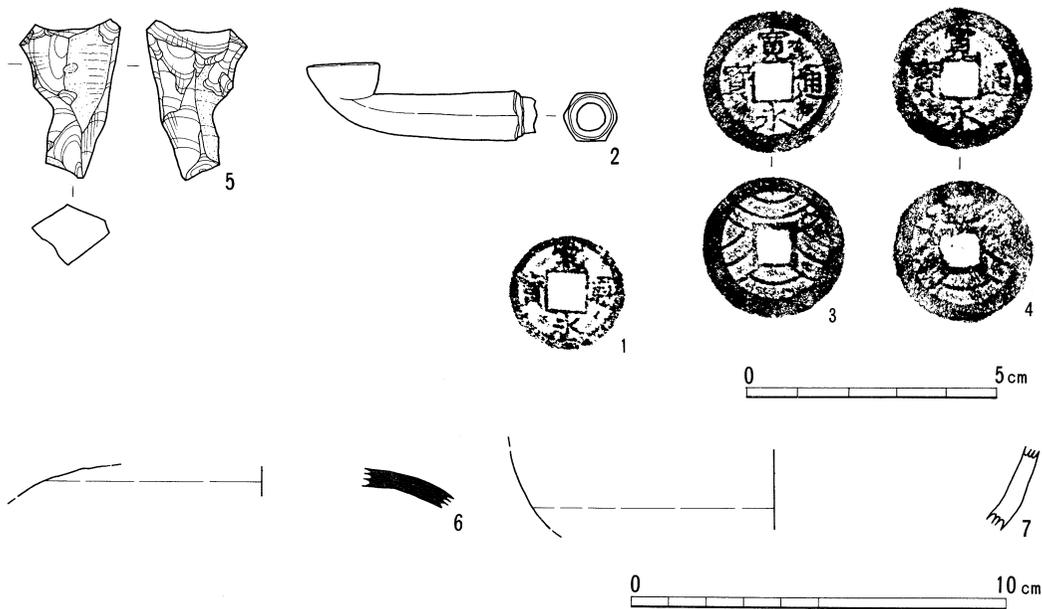
間点に位置している。

この溝心間幅は、380~400cmを測る。溝の断面はU字形で、覆土の下底には砂粒が多く混入するため、降雨時の流水、もしくは滞水も考えられる。溝は巨石1の東側にも延びているものと思われるが、集石1の礫が上面に崩落していたため、今回は調査日程の関係もあり、今後の調査を待つことにした。

### (7) 遺物 (第14図)

巨石1・2の周囲の黒色土中もしくは礫間で7点の遺物が出土した。1・3・4は銭貨である。1は寛永通宝で一文の鉄鑄銭、3・4は裏面に青海波を有する四文の青銅銭である。2は煙管の雁首で、竹管も一部残っている。5は黒曜石片で、剝離面を有するが定形石器ではない。6は須恵器の杯蓋片か杯の胴部と判断される小片で、ロクロ成形をしており、8~9世紀頃のものと思われる。7は土師器の杯の胴部片で外側はロクロ成形であり、黒色処理はなされていない。

他に巨石2付近で五厘銅銭、巨石1北側で染付の磁器(浅間山をモチーフとする)片が表面採集された。



第14図 鳴石遺跡出土遺物実測図

藤森栄一<sup>1</sup>氏は、昭和4年(1929)の夏に、諏訪史編纂会の人たちと共に雨境峠を踏査し、巨石1(鳴石)のすぐ脇の防火線の堀割りで、「簡単に石製模造品が拾えた」と記している。また、大場磐雄<sup>2</sup>氏も「峠神の祭祀とその遺物」で、「幸いにもこの付近を探查した結果、該石の北方数間の箇

所より滑石製白玉三箇と有孔円板及び劔形の破片等を採集できた。」と記している。

注

- 1 藤森栄一『古道』昭和41年9月 学生社
- 2 大場磐雄『神道考古学論攷』昭和18年12月 葦牙書房

## 2 法印塚 (別図2・図版4)

法印塚は、与惣塚地籍に所在し、勾玉原遺跡の南西に続く郡境丘陵の最高地点(標高1,581.7m)のN-18°-E、直線距離にしておよそ200mの位置にある。中与惣塚は、法印塚のS-20°-W、約150mの距離にある。

法印塚の西側は、郡境丘陵から北東方へ4~5°に傾斜する緩斜面で、つつじなどの喬木と白樺などの落葉樹が自生し、石塚(ケルン)の西付近から東方一帯が落葉松の人工林になっている。法印塚は、この丘陵斜面の裾部付近に位置し、南西部を標高1,575mの等高線がとおっている。そして、法印塚(ケルン)の東裾際には、古道跡が南北にとおり、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線との間のおよそ35m、南北100mの範囲がほぼ平坦面となっている。



第15図 調査前の法印塚

周辺の微地形は、法印塚の北方50m付近から北東方に向って傾斜が急になり、勾玉原地籍の窪地に続いている。法印塚の一帯には、丈の長いクマザサが密生し、石塚(ケルン)も雑草とクマザサに覆われ、形態が容易に確認できないほどであった。石塚(ケルン)の頂上付近には、桜の老木があり、枝が朽ち折れて、傍らには檀の木が生えている。

法印塚の別称について、桐原健氏は報告書<sup>1</sup>に「法印塚(山伏塚)」と記し、大場磐雄氏<sup>2</sup>は「俚俗山伏塚とも中与惣塚とも呼ぶ。」と記している。山伏塚の名称は、両氏によって法印塚、あるいは中与惣塚の別称として記されているが、立科の人々の間では「山伏塚」の名称は全く知られていない。恐らく、諏訪の人たちの間に伝わる別称であろう。それにしても、どちらの石塚(ケルン)の別称であろうか。

与惣塚の別称については、小諸藩士稲垣市右衛門の『蓼科山覚附』に「傾城塚」の名称がみえる。この史料では、法印塚の別称とは明記していないが、中与惣塚との位置関係から法印塚のこ

とと考えられる。

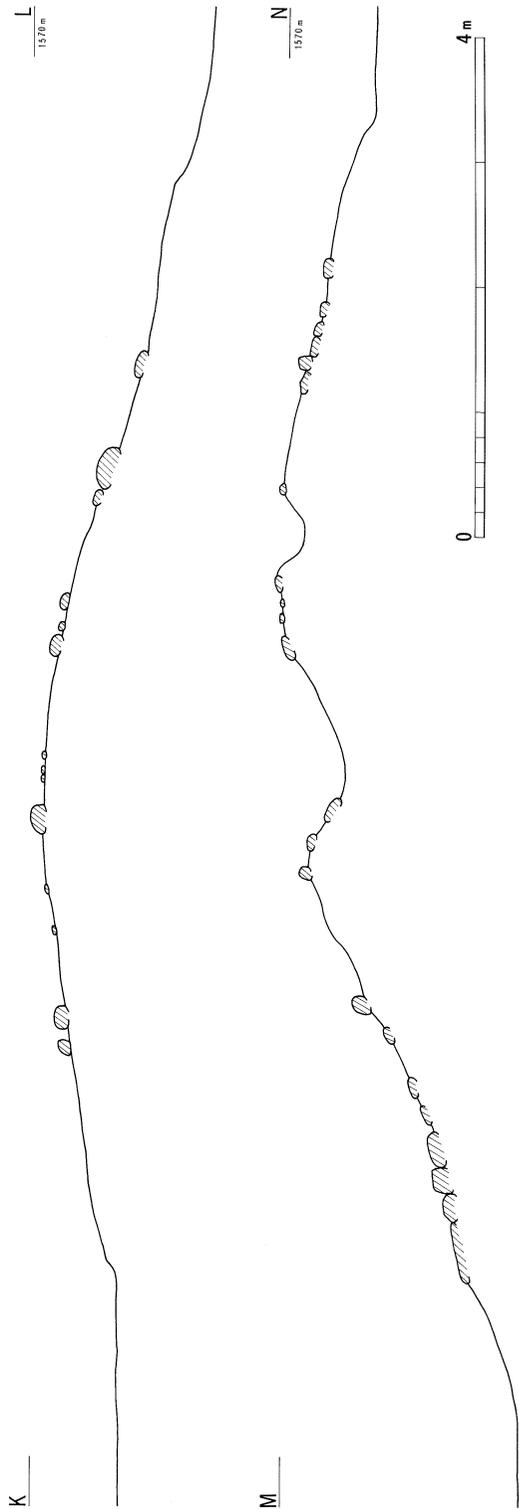
法印塚は、中与惣塚・与惣塚・賽ノ河原とともに、大小の礫を積んで築いた石塚(ケルン)である。この石塚(ケルン)の一般的な呼称について、大場磐雄氏は「恰も積石塚を見る如くである。」と記して、積石塚古墳と紛らわしい「積石塚」の名称を避けている。また、桐原健氏は、前述報告書で「ケルン」の名称を用いているが、「ケルン」の語は、岩波の『広辞苑』にも、「山頂や登降路を示す積石」とあるように、一定の規模をもった石積の塚を示す語のイメージは薄い。

法印塚などの構造は、明らかに礫石を積んだ積石塚であるが、本稿では、構造の実態を生かしながら、古墳の積石塚との混同を避けるために、石塚(ケルン)の名称を用いておきたい。

法印塚の調査は、不順な天候と鳴石遺跡の調査面積の拡大によって、予定より大幅に遅れて8月9日にグリットを設定し、8月12日から開始した。調査はまず、密生している下草を刈り、石塚(ケルン)の裾部から南東4mの位置をA1基点とし、磁北方向に1~9、それと直交する東西方向にA~Jの2×2mのグリットを設定し、実測時には、このグリットを4分して1×1mグリットに細分して計測した。

調査は、頂上部から次第に裾部に向って精査し、裾部の位置確認に努めた。今回の法印塚の調査面積は、石塚(ケルン)の周辺部の調査を含めて、およそ290㎡に達した。

調査は遅れている日程も考慮し、本来の目的である遺跡の範囲確認、石塚(ケルン)



第16図 法印塚断面図 (1:60)

の現状の把握、性格の解明に重点をおいて実施し、表面の芝土(覆土)を除去して礫面を検出することから始めた。調査前の法印塚の外観では、芝土に覆われていたこともあるが、比較的よく保存されているように見えた。

しかし、芝土を剥ぐと、長径30cm前後の比較的大きな角礫が、石塚(ケルン)の南と北の裾部に散乱し、あたかも双方墳のような形態が現われた。しかし、これらは調査の進行によって、いずれも石塚(ケルン)表面の礫が人工的理由によって崩落したものと認められた。

法印塚の規模は、南・北両面が大きく崩されているので、正確な計測は困難であったが、東裾部は比較的よく原形を保ち、西面裾の葺石も原位置を示すものと認められた。これらを基準にして計測すれば、東西径が10.2m、南北径が10.4mのほぼ円形に築かれているものと認められる。高さはローム層が東面に約8°傾斜しているため、東裾部の基盤から195cm、西のローム面から80cmを測る。但し、東裾部に接して古道が南北にとおっているため、褐色土層(第2層)上面を検出面とし、ローム層(第3層)までは掘り下げていない(図版4)。

法印塚の構造は、礫面を割って塚の断面を調査していないので明確ではない。しかし、西側裾部の断面は、明らかに盛土の末端に葺石で土留めをしている。従って、法印塚の構造は、基盤に一定の盛土をして、大小の礫をその上に積んだものと考えられる。礫は蓼科山の安山岩を用い、拳大の円礫から大きなものは長径90cm、短径30cm、あるいは40×40cm大の角礫が使われている。

特に、大きな角礫は、石塚(ケルン)の裾部に用い、東面ではほぼ階段状に大きな角礫を積んで、石塚(ケルン)を築いた構造がよく残っている。

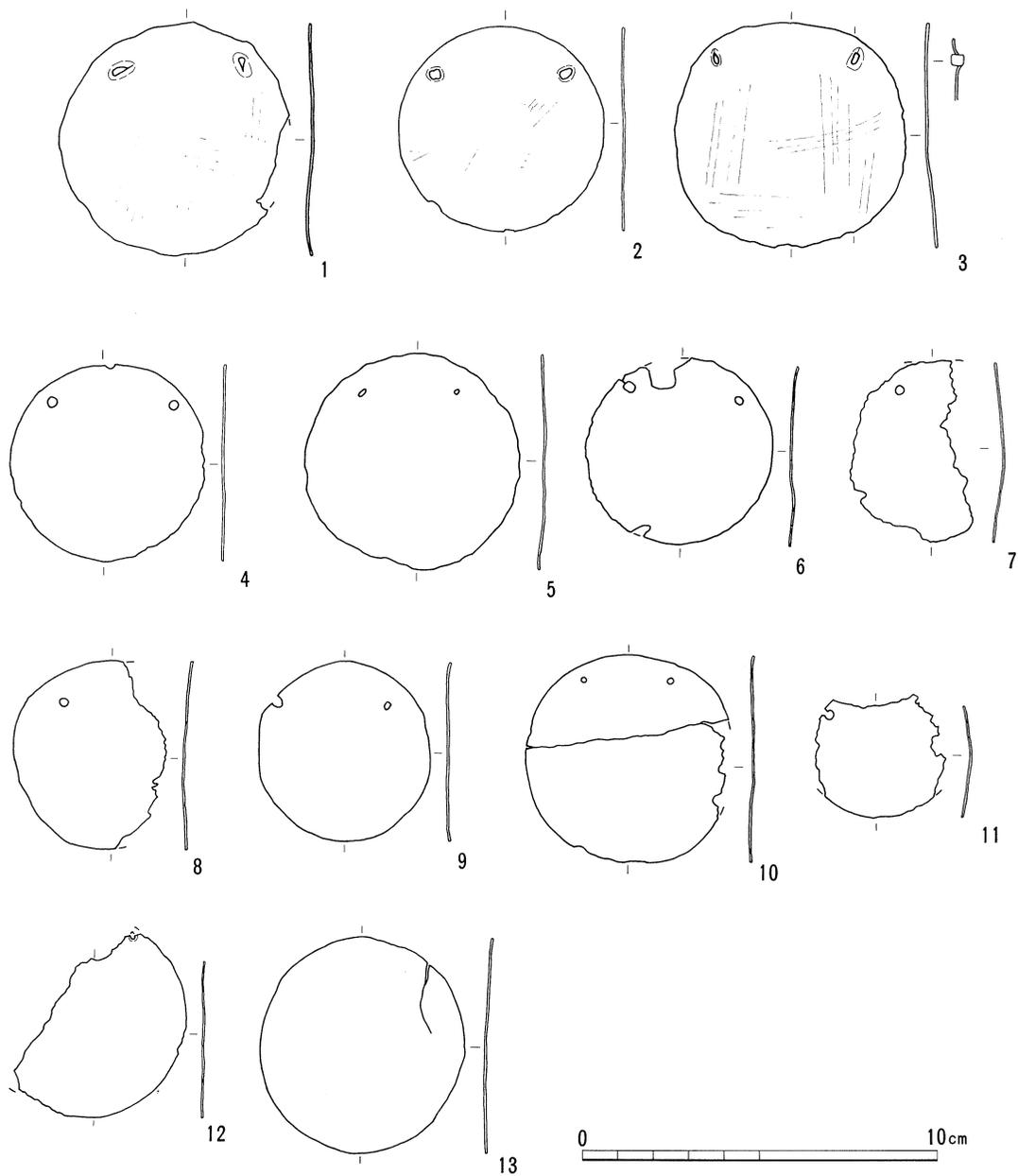
法印塚の保存状態は、前述のとおり南・北両面の石積みが崩されて、大きな角礫が広い範囲に散在している。また、頂上付近のF4グリットには、長径170cm、短径70cm、G4グリットには長径80cm、短径45cmの大きな穴があり、いずれも人工的な破壊によるものと考えられる。

地層のプロファイルは、東側の古道と考えられる地点では、10~13cmの芝土を含む黑色土(第1層)の下に、8cm前後の褐色土層(第2層)があり、ローム層(第3層)に達していた。その他の地点では、表土層をなす芝土を含む黑色土(第1層)が、10cm前後の厚さで認められ、その下層は直ちにローム層(第3層)に続いていた。

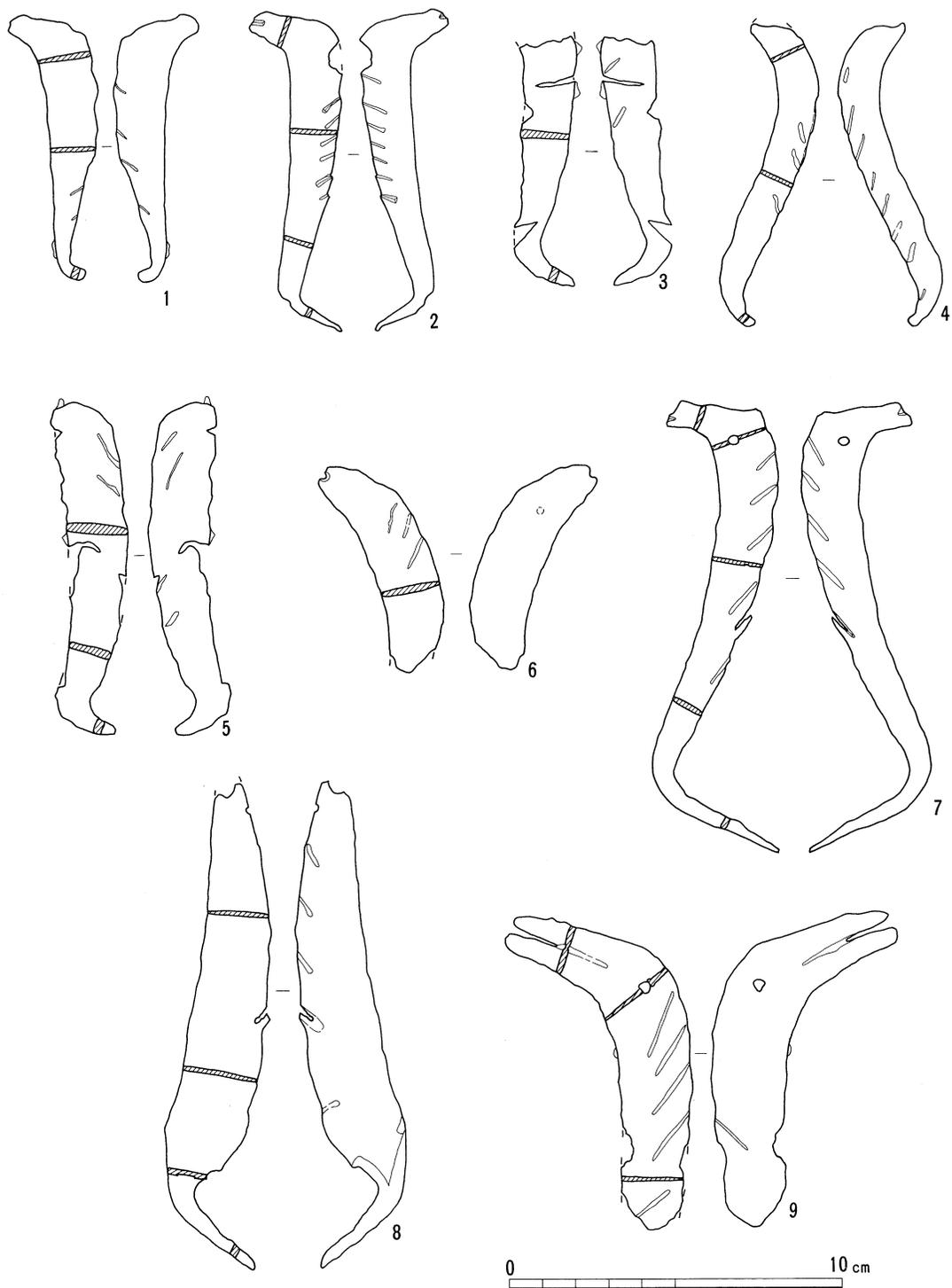
今回の調査は、限られた調査日程の中で、礫表面の芝土を除去して、石塚(ケルン)の規模、石積みの状況をできるだけ正確に把握するよう努めた。しかし、礫面を掘り割って内部の構造を確認する調査は行っていない。その意味では、石塚(ケルン)表面の調査の域を出ていない。石塚(ケルン)内部の調査は、学問的には大いに興味はあるが、今後の課題としたい。

今回の調査で、表面採集の遺物は全く発見されていない。また、石塚(ケルン)礫面の調査ではあるが、出土遺物も全く検出されていない。石塚(ケルン)頂上は、かなり攪拌された形跡があり、今後もこの地点からの遺物の検出は多くを期待できない。

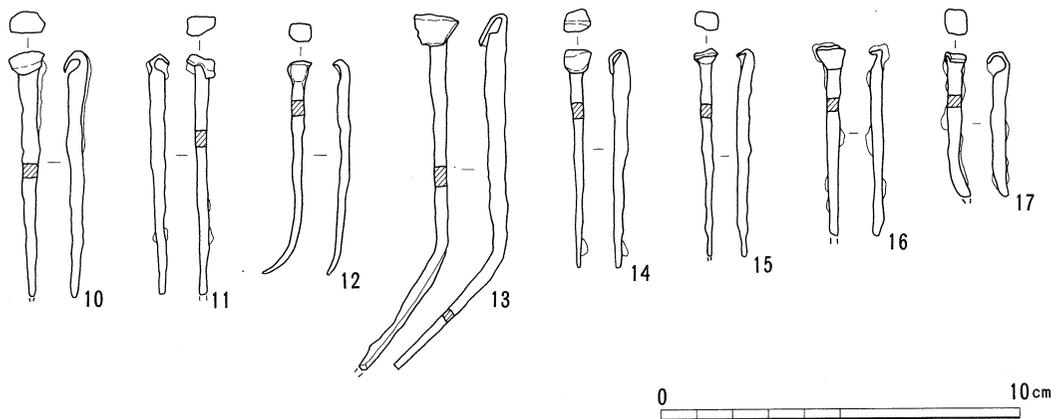
昭和41年の中与惣塚の分布調査では、頂上付近から御正躰13(第17図)、薙鎌9(第18図)、鉄釘8(第19図)、北宋銭を主体とする銭貨39(第20図)など、極めて豊富な遺物を検出している。これ



第17图 中与惣塚出土銅製品



第18図 中与惣塚出土の鉄製品(1)



第19図 中与惣塚出土の鉄製品(2)

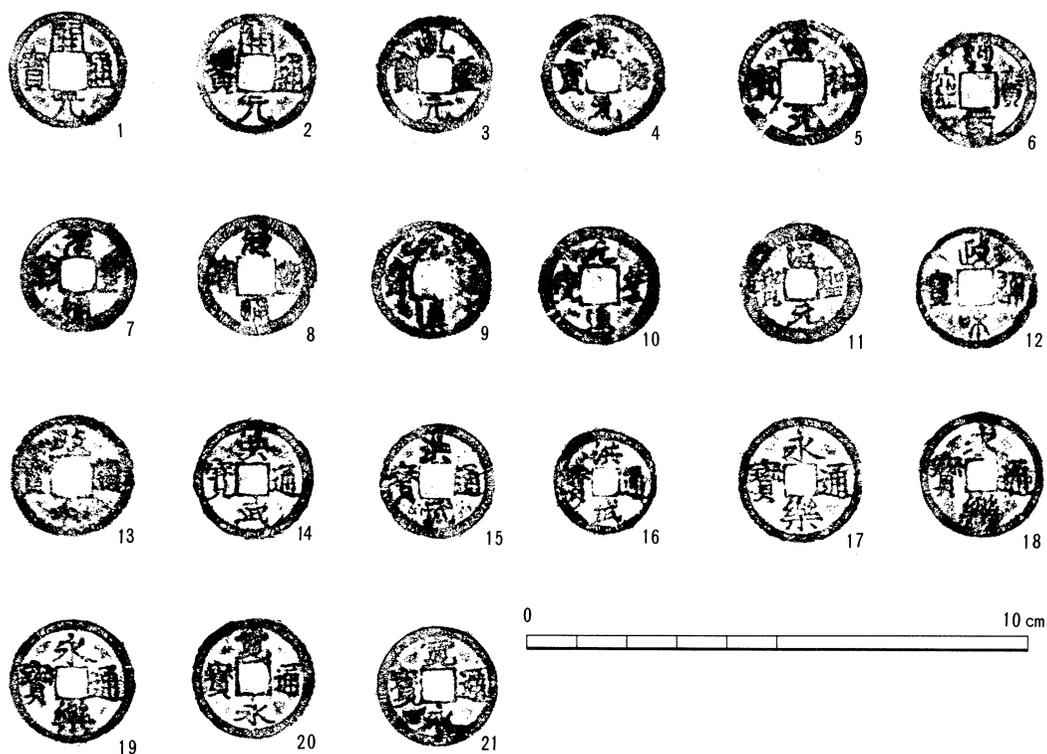
らの出土遺物は、現在立科町歴史民俗資料館に保存されている。

今回の調査では、出土遺物によって法印塚の年代を決定する直接的な手がかりはない。しかし、この道筋に築かれた法印塚・中与惣塚・与惣塚・賽ノ河原などの石塚（ケルン）は、いずれも脇をとおり蓼科山麓の道と深い関係をもつ遺跡である。このことは所在する位置、共通する構造、いずれも頂上に檀の木が植えられていることなどの多くの共通点、類似性から容易に推察できる。また、檀の木は、古来諏訪地方では「讃えの木」と称し、神木の中に含めている。そして、この檀の木が4つの石塚（ケルン）だけでなく、古代の祭祀遺跡と考えられる鳴石遺跡にも見られることは興味深い。

さらに、この4つの石塚（ケルン）は、いずれも峠神に対する祭祀、蓼科山の神に対する畏敬・尊崇の祭祀の場という共通の性格をもち、法印塚と中与惣塚が雨境峠の頂上（最高地点・標高1,578.2m）の北側に、与惣塚と賽ノ河原が頂上の南側に位置するなど、相互に深い関係をもつ遺跡である。従って、これらの石塚（ケルン）の築造年代も、それほど大きな差はないものと考えられる。

法印塚の築造年代は、この推理に誤りがなければ、中与惣塚の出土遺物によって、およその築造の時期を知ることができる。しかし、より正確な年代の推考は、今後の調査を待ちたい。

中与惣塚の出土遺物については、桐原氏の詳細な解説<sup>5</sup>と考証があるので、贅言を加える必要がなく、紙数の制約もあるので重複を避けたい。桐原氏は、これらの出土遺物のうち、銭貨が北宋銭を主体とすること、薙鎌の形式、御正躰などの特徴を総合して、「まづは鎌倉末、降っても室町初期<sup>6</sup>」としている。



第20図 中与惣塚出土銭貨

注

- 1 桐原健「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査」『信濃』第19号第6号 P57
- 2 大場磐雄『神道考古学論攷』昭和18年12月 葦牙書房
- 3 大場磐雄 注2「前掲書」
- 4 桐原健 注1「前掲書」P56・59～
- 5 桐原健 注1「前掲書」P59
- 6 桐原健 注1「前掲書」P60・61・62・63

## IV 古道の調査

雨境峠祭祀遺跡群と総称される鳴石・勾玉原・赤沼平（女神湖西岸）・鍵引石・法印塚・中与惣塚・与惣塚・賽ノ河原の8遺跡は、いずれも道に関係する遺跡である。このうち鳴石・勾玉原・赤沼平（女神湖西岸）・鍵引石の4遺跡は、<sup>1</sup>剣形・有孔円板・管玉・白玉・小玉などの滑石製模造品（幣）を出土し、古東山道<sup>1</sup>に関係する遺跡と考えられている。一志茂樹氏は、この道の性格について、官道としての東山道開通以前の「征夷路線<sup>2</sup>としての性格をになって重視されてきたもの」と結論し、大和王権の軍用道路と論断している。

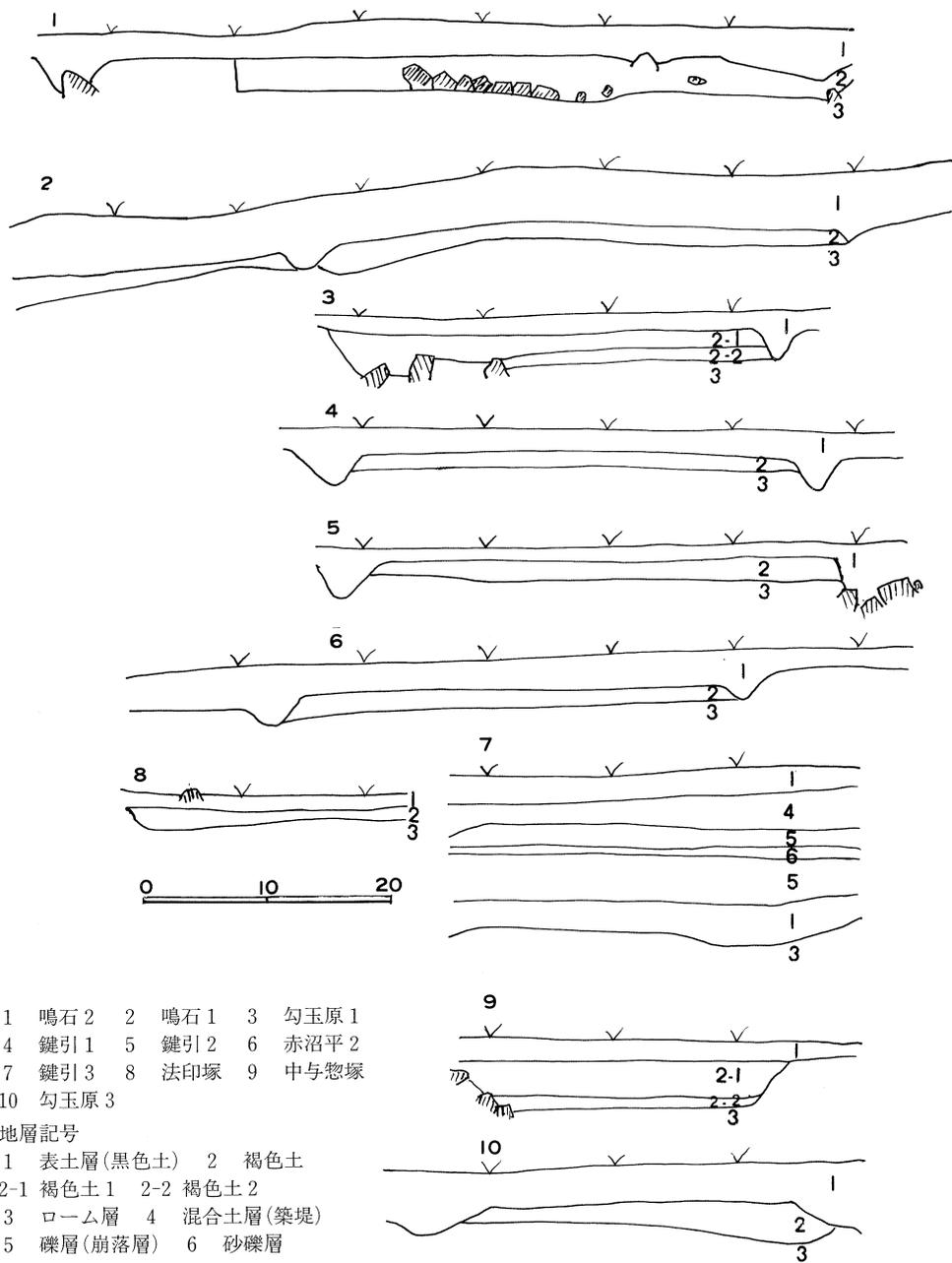
また、法印塚・中与惣塚・与惣塚・賽ノ河原の4遺跡は、鎌倉末、降っても室町初期に築造された石塚（ケルン）で、境の神信仰などとも関係する中世の遺跡と位置づけられている。従って、これらの遺跡が、道の祭祀に関係するものであるならば、当然遺跡と遺跡を結ぶ線に、その時期の道が存在した筈である。そして雨境峠祭祀遺跡群の調査は、祭祀遺跡と関係する道の調査と併せてこそ正当に論ぜられるものとする。

### 1 古東山道推定地点の調査

大和王権は、稲荷山古墳出土の鉄剣銘文などによって、獲加多支鹵大王のころ、すなわち雄略天皇の辛亥年（471）には、少なくとも武蔵付近までその支配下においていたことが知られている。しかし、この東征路としての古東山道に関する史料は極めて乏しい。『記・紀』の中から古東山道に関係すると考えられるものを検索すると、『日本書紀』では、まず、崇神天皇10年の条の四道將軍派遣の記事、景行天皇25年の条の武内宿禰の「北陸及び東方諸国」檢察の記事がある。また、『古事記』には崇神天皇の条に「大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣東方十二道而」の記事があり、倭建命にも「東の方十二道」という記事がある。この記事では東海道と東山道が区別されていない。しかし、一般にはこの所伝の方が古いと考えられている。そして、この「東方十二道」は、東海・東山道の諸国と考えられるが、『記・紀』いずれの記事も、経路を記していない。

東方への道は、『記・紀』の日本武尊の東征物語に記されている。『日本書紀』景行天皇40年の条以下に記されている経路は、伊勢・駿河・相模・上総・陸奥・甲斐・武蔵・上野・（碓日坂）・信濃・（信濃坂）・（美濃）・尾張である。

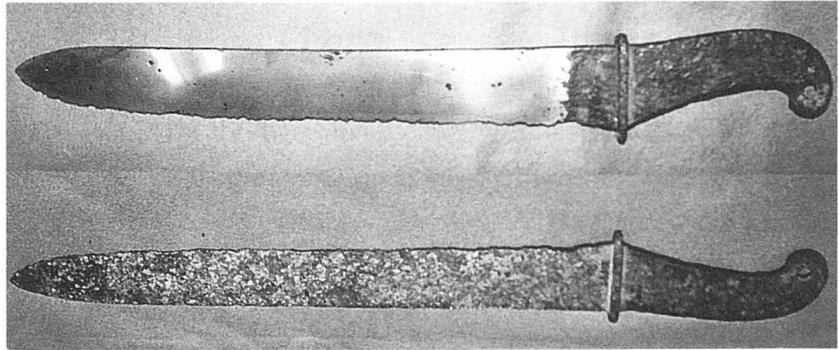
また、『古事記』では、小碓命（倭建命）の条に、伊勢・尾張・相模（武）・（上総）・蝦夷・（武蔵）・相模・（足柄の坂本）・甲斐・科野・（科野坂）・（美濃）・尾張の道筋が記されている。この『記・紀』の記事は、そのまま史実と認めることはできない。しかし、この記事の信濃の経路と滑石製模造品の出土地を結べば、およそ令制以前の古道筋を辿ることができる。



第21図 古道調査地点断面図 (1:60)

古東山道の道筋は、上野・碓日坂<sup>3, 4</sup>（入山峠）・瓜生坂・雨境峠・信濃坂<sup>5</sup>（神坂峠）と考えられる。雨境峠付近の滑石製模造品の出土地を結べば、鳴石・勾玉原・赤沼平（女神湖西岸）、そして、蕨手刀出土地の猿小屋付近・御座岩である。この道筋は、佐久・小県郡の郡境をとおる尾根の道、まさに須芳山の嶺道である。

一志茂樹氏は、『令集解』巻22「考課令・殊功異行」の条の「古記云、殊功、謂笠大夫作伎蘇道、増封戸、須芳郡主帳作須芳山嶺道、授正八位之類也」を検証して、この道を令制



第22図 猿小屋地籍出土の蕨手刀

以前の古道と位置づけ、「明らかに〔須芳山の嶺の道〕とある以上、峠といふより山の嶺つづきを過ぎて他地方に通ずる道を開いたといふことである。」と考証している。まさに卓見である。しかし、このとき一志氏は、須芳山の嶺の道を雨境峠の道として、「役ノ行者越」の道を想定している。この道は地形的にみても、「嶺道」とするには相応しくない。「須芳山の嶺の道」は、鳴石から勾玉原、そして新たに発見された赤沼平（女神湖西岸）をとおり、白樺湖畔の御座岩に通ずる郡境の丘陵の道、尾根道が最も「須芳山の嶺の道」の名に適合している。そして、このころの雨境峠は、勾玉原遺跡の南方に位置する丘陵の最高地点（標高1,581.7m）であったと考えられる。

また、須芳山の嶺の道が、東山道開通以前の征夷路線としての性格をになって重視された軍用路であったとすれば、当然かなりの広さの道幅が求められる。例えば、1,000人の兵士が行軍するとすれば、幅1mの道で約1kmの隊列になり、ほとんど軍事的意味をなさない。従って、大和王権が東国経略の軍用路としてこの道を開いたとすれば、山間部であっても道幅は最低2人以上の兵士の並列が必要になり、3m以上が軍用道路としての最低条件と考えられる。例えば、平坦地の埼玉県東<sup>7</sup>の上遺跡の道路遺構は、両側溝心心間の幅が12mを測り、7世紀第3四半世紀に位置づけられている。

雨境峠祭祀遺跡群に関連する古道の調査は、まず、この道を想定しながら各調査ポイントを設定した（第2図a～h）。調査方法は、祭祀遺跡に最も近い地点で、再三の予備調査・踏査を実施して調査地点を選定し、古道の検出に努め、地形的・位置的調査点の相違による道幅・構造等の特色と共通点を見出した。幸い、この祭祀遺跡群には、4箇所の中世の石塚（ケルン）があり、この隣接地で中世の道の特徴を把握することができた。さらに、蓼科山麓には、六川源五右衛門氏が、明治29年（1896）から古道を改修して開いた道、いわゆる六川新道と呼ばれる近代の道があり、こ

の道についてもその特徴を確認し、古代・中世・近代の道の比較研究から道の時代的位置づけを試みた。

この比較研究のデータによれば、蓼科山麓の古代祭祀遺跡を結ぶ古東山道は、幅が3.5m以上を測り、谷側に側溝を設け、山側に土留めと考えられる大きな角石を配しているのが一般的である(図版3・第21図1～7)。

中世の道は、道幅が2m前後とかなり狭くなり、湿地などを例外として、黒色土を掘り窪めただけの構造である(第21図9～10)。六川源五右衛門氏が開きたいわゆる六川新道は、計画書には幅3間とあるが、落葉松並木の間の道幅が2m前後であり、路面に砂礫が僅かに敷いてある。

古道の調査地点の周囲は、全くの原野・山林であって、里の道では望めない単純な地層が、調査に大きなプラス要因となった。バージンな地層は、ローム層の上に腐食土の黒色土と地表の芝土が覆うだけで、何等変てつもない単純な層位を示し、硬度も小さいのが一般的である。これに対して古道面は、表土の黒色土を掘り窪めているため、必然的に黒色土とロームが捏ね合わされて硬い褐色土層をつくることになる(第21図・8の塩沢堰土地層を除く)。ただ、広大な原野で1本の道を探る調査は、決して容易ではない。また、この地域は、国立公園に指定されており、自然保護の観点から、調査地点の選定、調査の方法には細心の注意を払って実施した。

また、古東山道は、鳴石から鍵引石を結び、蕨手刀出土地点の女神湖東部、筑波大学付属高等学校桐陰寮の東方の二松学舎大学寮入口付近に通ずる古道があったものと推定される。この古道の調査は、与惣塚周辺の滑石製模造品の採集地点の確認と併せて、今後の調査を待ちたい。

鳴石1(第2図a・第21図2)は、平成4年春に牧場の柵脇で林道を改修することになり、緊急調査を実施した地点で、今回の調査した鳴石遺跡の西北端部である。祭祀遺跡に隣接するためか、褐色土層が東側の溝(幅45cm・深さ23cm)と西側の溝(幅20cm・深さ10cm)の溝心間で432.5cmを測る。そして、褐色土層はさらに西側にも約4mほど延びている。この地点は、他の調査地点と比較して覆土が極めて厚く、部分的に40cmを越えるところがある。これはこの付近の傾斜がやや急になっているため、表土の流入があったものと考えられる。

鳴石2(第2図b・第21図1)は、平成4年夏に調査した鳴石遺跡の北方およそ200mの地点である。近くに湧水があり、雨季には湿地となる難所であったと考えられる。東西両側に深い側溝が検出され、谷側の西側溝は幅約65cm、深さ35～60cmを測り、角石や平石で両壁と底をかためている。山側の側溝は、約1m近い幅があり、山側から流入する湧水を逃がす役割をしている。西路肩はローム面を残しているが、東路肩を硬い褐色土で固められている。この付近の道は、周囲の地理的条件から考えて、幾度か改修されたものと考えられる。この地点の道幅は、溝心間の幅が6mを測る。しかし、実際に踏み固められた路面と考えられる部分は、山側(図右寄り)の幅約365cmである。

勾玉原1(第2図f・第21図3)は、勾玉原遺跡に隣接する丘陵上の地点にあり、中世以降、山見以外にはほとんど利用されることのなかった嶺道である。道筋は郡境沿いに、赤沼平(第2図m・

第21図7)方面に続いている。山側に土留め用と思われる角石が列状に配され、谷川に簡単な側溝を築いている。溝心心間の幅はおよそ394cmである。

鍵引1(第2図i・第21図4)は、勾玉原1の南、賽ノ河原西方の礫地帯に位置し、周囲の状況から推考して礫を除去して道を開き、両側に簡単な側溝を築いたものと考えられる。溝心心間の幅は405cmを測る。

鍵引2(第2図j・第21図5)は、赤沼平(女神湖西岸)遺跡と標高1,575mの丘陵を間にした北側にあり、鳴石2と同様に湿地に隣接する位置にある。湿地のある谷側には堅固な石組みの側溝を築いている。この付近は、中世以降山見程度に使われる以外、全く利用されていない道であり、古代の道として最もバージンを残すものと考えられる。溝心心間の幅は435cmを測り、谷側の石組を伴う側溝は幅が60cm、深さ35cmを測り、山側の側溝は幅50cm、深さ32cmを測る。

赤沼平(第22図m・第21図6)は、勾玉原1と地形的位置が最も近似し、山側に土留めの角石を一行に配し(図版3)、谷川に簡単な側溝を設けている。

## 2 中世の古道推定地点の調査

中世の古道と推定される地点の調査は、平成4年夏に中与惣塚の北側(第2図h・第21図9)で実施し、平成5年に法印塚の東側とその北側に延びる道形を追って、勾玉原2(第2図d)地点と勾玉原3(第2図e・第10)地点の調査を実施した。

この地点の調査は、中与惣塚と法印塚に隣接する地点で、中世の道の特徴を確認し、明確に道形の残る地点を選定できたので、比較的容易に調査を実施することができた。2つの石塚(ケルン)の脇では、黒色土を掘り窪めただけの構造であり、道幅は200~210cmを測る。

勾玉原3では、道の両側を広く掘り窪めてあり、構造的に側溝とは云えないが、斜面上方からの流水を逃がす構造をもっている。路面には平石が配され、3地点の中では最も道らしくつくりされていた。

勾玉原2(第2図d)は、勾玉原3から続くとみられる地層の変化を認め、調査区を拡張して追究したが、道路の遺構は確認できなかった。しかし、この調査地点北端部からは、大量に黒曜石粒が検出された。

また、箕輪平でも、筑波大学付属高等学校桐陰寮付近から延びる道の遺構を求めて調査を実施したが、十分な成果は得られなかった。

### 注

- 1 大場磐雄「万葉集に表れた祭祀」『国学院雑誌』第53巻 昭和27年4月
- 2 一志茂樹「我が国中部山地上代高通路の一性格(承前)」『信濃』第5巻第7号 P28
- 3 山崎義男「上信国境入山峠祭祀遺跡について(附官道「東山道」碓氷峠の検討)」『考古学雑誌』

#### 第43巻第1号

- 4 梶山林継『入山峠』 昭和58年4月 軽井沢町教育委員会
- 5 大場磐雄『神坂峠』 昭和58年4月 阿智村教育委員会
- 6 一志茂樹「我が国中部山地上代高通路の一性格（承前）」『信濃』第5巻第7号 P26
- 7 飯田充晴「埼玉県東の上遺跡の道路遺構」『季刊考古学』第46号 1994年2月

### 3 勾玉原2地点出土の黒曜石片

古東山道を確認するため、勾玉原2地籍に設定したトレンチ（Aトレンチ4.5.6・北端付近）内と、箕輪平のトレンチの黒色土層中から、大豆大から指頭大の黒曜石が多数出土した。それぞれの黒曜石には、剥離面がほとんどなく、表面は摩滅した自然面である。以上からこの黒曜石は、石器製作やそのための原石として搬入されたものとは考えられない。各トレンチの調査は、ローム層上面でとどめたが、これらの黒曜石片は、いずれも黒色土層中から検出されている。

黒曜石の色・透明度・気泡などの特徴からは、長門町の鷹山遺跡群の星糞峠の黒曜石採掘跡に散乱する黒曜石片と類似している。 (望月)

#### おわりに

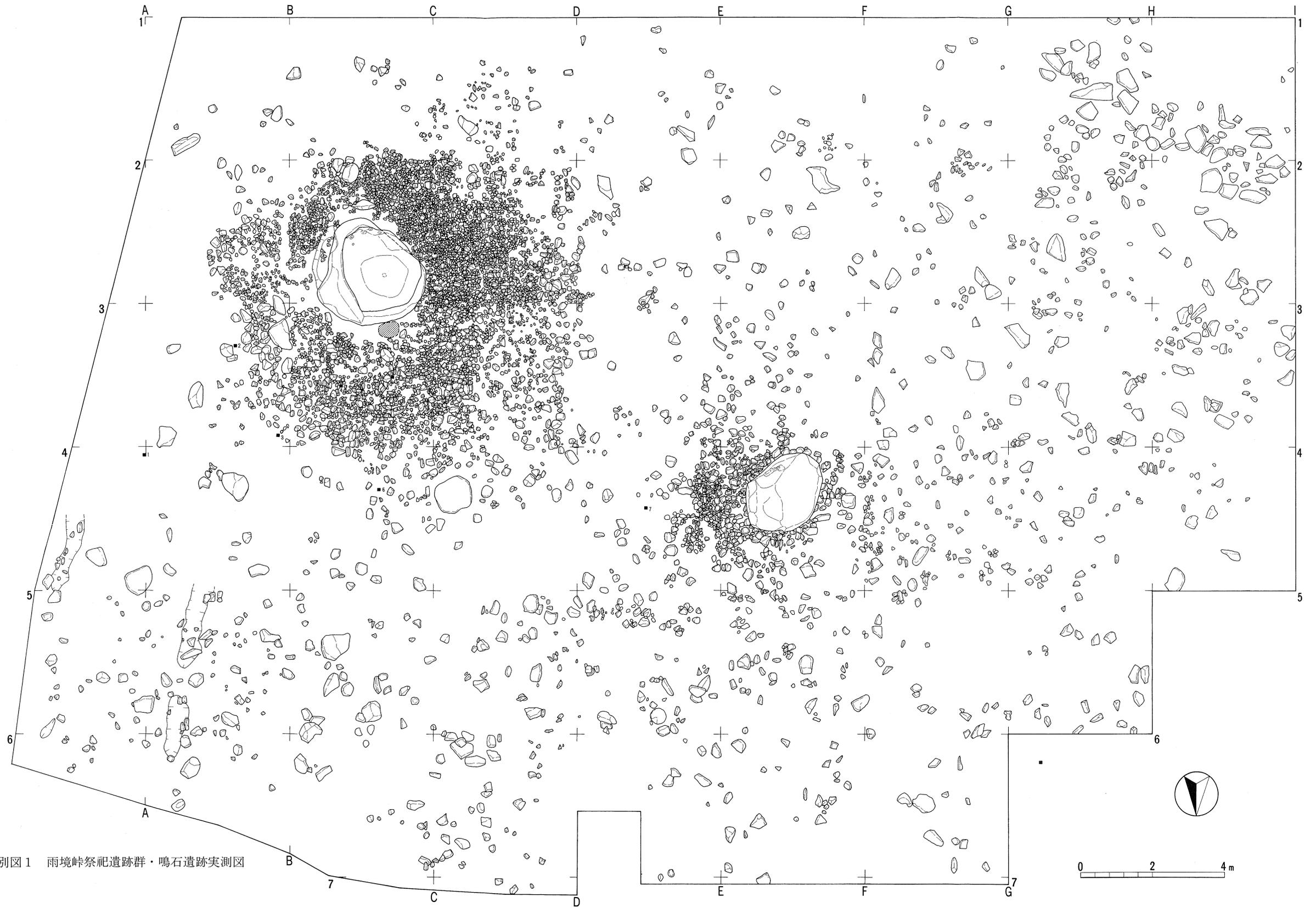
今回の調査では、遺構の年代を推考できるほどの遺物は、ほとんど検出されていない。例えば、鳴石遺跡については、敢えて微小な出土遺物でみれば、須恵器片によって伺える8世紀以降と云うことになる。しかし、藤森栄一氏・大場磐雄氏は、この遺跡から滑石製模造品を採集し、その状況を著書で紹介している。しかし、残念ながらその採集遺物は実見していない。

また、勾玉原遺跡から採集された豊富な遺物も、ようやくその一部を実見し、実測を進めているところである。その他の遺跡の採集遺物についても、ほぼ同様な状況である。

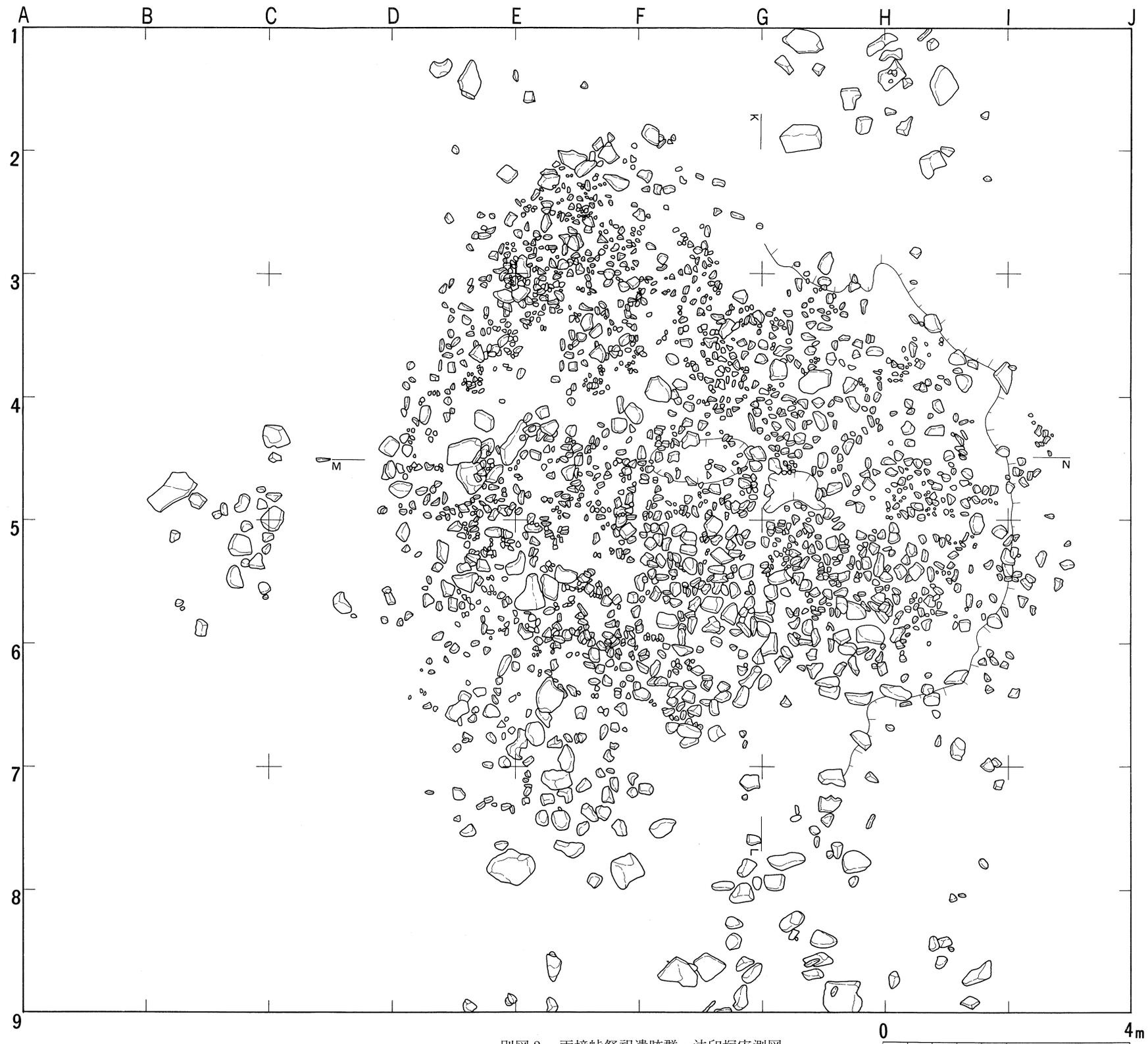
本稿は、調査の概要をまとめた中間的な報告であり、現在、各遺跡の採集遺物の所在の確認と精査を進めている。鳴石遺跡の集石遺構についても、文中で述べたとおり、集石遺構の構造、鳴石（巨石1）と集石遺構の関係については、今後の調査を待つことになる。

本稿では、V考察の項で、調査資料を概観して、若干の考証をする予定であった。しかし、紙数の関係で割愛せざるを得なくなったため、できるだけ多くの調査資料・実測図を載せ、多くの皆様のご示教をお願いし、今後の調査結果を総合して、本報告書でまとめたいと考えている。

今回の調査では、多くの方々のご協力によって、期待以上の成果を収め、今後の調査の端緒をつくることができた。最後に重ねて、関係の皆さんに心から謝意を表する次第である。



別図1 雨境峠祭祀遺跡群・鳴石遺跡実測図



別図2 雨境峠祭祀遺跡群・法印塚実測図



蓼科山麓雨境峠祭祀遺跡群概報

— 立科町文化財調査報告書第4集 —

---

平成6年3月 発行

---

編集 長野県立科町教育委員会

発行 長野県立科町  
長野県立科町教育委員会

---

印刷 ほおずき書籍株式会社

---